櫛形町文化財調査報告書 No.19

前原G遺跡

―― 新山梨環状道路建設に伴う発掘調査報告書 ――

2000. 2

櫛形町教育委員会

山梨県新環状・西関東道路建設事務所

櫛形町文化財調査報告書 No.19

前原G遺跡

―― 新山梨環状道路建設に伴う発掘調査報告書 ――

2000. 2

櫛形町教育委員会

山梨県新環状・西関東道路建設事務所

調査区より村前東Ａ遺跡を望む（南東より）

調査区より角力場第２遺跡を望む（北より）

序　　文

櫛形町は甲府盆地の西縁に位置し、櫛形山の東麓に発達した町であります。釜無川右岸西方一帯は峡西地方と呼ばれ、本町は古来からこの地方の政治・経済・文化の中心地として栄えてきました。

櫛形山山麓の台地からは、石器や縄文・弥生時代の土器が出土したり、住居跡なども多く発見されています。また、古墳も峡西地方唯一の前方後円墳である物見塚古墳をはじめ六科丘古墳、鋳物師屋古墳、狐塚古墳などがあり、これらの古墳とそこから出土した鉄剣、銅鏡、管玉、臼玉などによってすでに5世紀前半には、この地方に有力な支配者が存在していたことが伺えます。

平安時代に入ると甲斐源氏の流れをくむ小笠原長清が、現在の櫛形町小笠原を所領し、長じて京都に移り住み、その子孫は各地で守護藩主となり「小笠原流」の名家としての名を広めました。このことから当町は『小笠原氏発祥の町』といえましょう。

さらに、平成6年には、下市之瀬の鋳物師屋遺跡から、国の重要文化財に指定された土偶など205点が出土しましたが、美術的、学術的にも価値の高いものであると評されています。

この度、中部横断自動車道、櫛形・若草インターチェンジへのアクセス道路として新山梨環状道路が建設されることに先立ち、櫛形町吉田地籍で当地の埋蔵文化財である前原G遺跡の発掘調査を行いました。その結果、古墳時代の竪穴状遺構をはじめ、江戸時代後期から昭和初期にかけての粘土採掘坑が発見されました。今回発掘された粘土採掘坑は隣接する若草町の特産品である屋根瓦を作るための原料の粘土を採掘した跡で、近代の地域産業史を明らかにする上でも貴重な発見でありました。

今回の調査において多くの重要な事柄が発見され、さらに従来の知見に付け加えるべき新たな事実も確認することが出来ましたことは本書に述べる通りであります。

最後になりましたが、今回の発掘調査、ならびに報告書作成にあたりご指導、ご協力をいただきました皆様に心から感謝申し上げます。

平成12年2月

櫛形町教育委員会
教育長　藤巻　進

例　　言

1．本書は新山梨環状道路建設に伴い山梨県新環状・西関東道路建設事務所の委託を受け櫛形町教育委員会が実施した山梨県中巨摩郡櫛形町吉田字前原577-1他に所在する前原Ｇ遺跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は平成11年２月１日～３月31日までの２ヶ月間に亘って実施した。また出土品の整理・報告書の作成はその他の事業の合間をぬって平成11年４月１日～平成12年２月末日まで断続的に行った。

3．調査にあたった組織・調査参加者は以下の通りである。

調査主体者	櫛形町教育委員会　　教育長　藤 巻　進
調査担当者	山下　大輔（櫛形町教育委員会　嘱託職員）
調　査　員	若林　初美・小口妙子（整理作業時）
事　務　局	櫛形町教育委員会文化財係
調査参加者	相川春美・飯久保初美・入倉妙子・入倉とらえ・加藤由利子・川崎しげ美・神田久美子・北村利恵・小松スガ江・桜田和子・桜田定子・桜田みさえ・鈴木アサ江・長沼豊子・生原浩美・由井伴三

4．報告書作成に関わる編集は山下・若林・小口があたり、執筆分担は以下の通りである。

第Ⅰ章、第Ⅱ章、第Ⅲ章第２節、第Ⅳ章第２節……山下

第Ⅲ章第１節、第Ⅳ章第１節……小口

5．本報告書に関わる出土品及び記録図面、写真等は櫛形町教育委員会に保管してある。

6．発掘調査及び報告書の作成にあたって、下記の諸氏・諸機関からご指導、ご協力をたまわった。記して謝意を表する次第である。

小野正文・森原明廣（山梨県教育委員会学術文化財課）、田中大輔（若草町教育委員会）、米田明訓（山梨県埋蔵文化財センター）、神戸市立博物館、河野礼二、河野竜也

凡　　例

1．遺構番号は原則として確認順である。

2．遺構・遺物の挿図及び表の指示は下記の通りである。

1）遺構

・実測図の水糸レベルは海抜高を示し、単位はｍである。

・規模は相対する壁の最長距離で求めている。

・遺物番号は本文・挿図・表・写真図版で全て一致する。

2）遺物

・土器観察表においてはＡは法量、Ｂは遺存率、Ｃは調整、Ｄは胎土、Ｅは色調、Ｆは焼成を示す。さらにＡの法量はｌが口径、ｂが底径、ｈが器高を表し単位はcmで（ ）は推定値である。

また、色調説明は「標準土色帖（1992年度版）」（農林水産省農林水産技術会議事務局監修／財団法人日本色彩研究所色票監修）に基づき記述した。

目　　次

序　　文
例　　言・凡　　例

第Ⅰ章　調査の概要 …… 1
　第１節　調査に至る経緯と経過 …… 1
　第２節　調査の方法と経過 …… 1

第Ⅱ章　遺跡の概観 …… 1
　第１節　地理的環境 …… 2
　第２節　歴史的環境 …… 2

第Ⅲ章　発見された遺構と遺物 …… 9
　第１節　古墳時代の遺構と遺物 …… 9
　　１）竪穴状遺構 …… 9
　　２）遺構外出土土器 …… 12
　第２節　近世～近代の遺構 …… 13

第Ⅳ章　ま　と　め …… 17
　第１節　古墳時代の遺構と遺物 …… 17
　第２節　粘土採掘坑について …… 18
　引用参考文献

附章　櫛形町前原Ｇ遺跡出土土器及び粘土の胎土分析 …… 19

報告書抄録

挿図目次

第１図　遺跡周辺地形図（1/5,000）……4
第２図　遺跡一帯の古地図……5
第３図　遺跡位置図及び周辺遺跡分布図（1/25,000）……6
第４図　全体図・トレンチ配置及びセクション図（1/600、1/80）……7・8
第５図　１号竪穴状遺構（1/40）……9
第６図　１号竪穴状遺構出土土器（1/3）……10
第７図　２号竪穴状遺構（1/40）……10
第８図　２号竪穴状遺構出土遺物（1/3・2/3）……11
第９図　遺構外出土遺物（1/3）……12
第10図　粘土採掘坑（1/120）……13
第11図　試掘トレンチ配置及びセクション図（1/2,000・1/160）……15・16

表目次

第１表　１号竪穴状遺構出土土器観察表……10
第２表　２号竪穴状遺構出土土器観察表(1)……11
第３表　２号竪穴状遺構出土土器観察表(2)……12
第４表　遺構外出土遺物観察表……12

写真図版目次

巻頭図版１　調査区より村前東Ａ遺跡を望む（南東より）
巻頭図版２　調査区より角力場第２遺跡を望む（北より）

図版１　調査区全景
図版２　(1)　１号竪穴状遺構
　　(2)　２号竪穴状遺構
図版３　(1)　２号竪穴状遺構遺物出土状況（全景）
　　(2)　２号竪穴状遺構遺物出土状況（部分）
図版４　(1)　粘土採掘坑（トレンチ２）
　　(2)　トレンチ１断面
図版５　(1)　粘土採掘坑
　　(2)　畝状遺構
図版６　(1)　畝状遺構
　　(2)　畝状遺構（南より）
図版７　出土遺物
図版８　調査区作業風景

第１章　調査の概要

第１節　調査に至る経緯と経過

本遺跡は、中巨摩郡櫛形町吉田字前原に所在する。櫛形町東縁部では日本道路公団が行う中部横断道の建設が行われている。櫛形町には若草・櫛形インターチェンジの設置が予定されていることから、山梨県では甲西バイパスから若草・櫛形インターチェンジへのアクセス道路を計画した。工事主体者である新環状・西関東道路建設事務所は路線予定地内での埋蔵文化財の有無および取り扱いを櫛形町教育委員会に問い合わせた。櫛形町教育委員会ではそれを受け現地踏査および遺跡台帳で確認を行い、当該地は周知の埋蔵文化財である前原Ｇ遺跡の周縁にあったっていることを確認し試掘調査を実施した。調査の結果、若干の遺物と竪穴状遺構と思われる遺構が検出されたため発掘調査が必要であると判断し、その旨を新環状・西関東道路事務所に回答した。櫛形町教育委員会では山梨県教育委員会学術文化財課の指導を受け新環状・西関東道路建設事務所と具体的な協議に入り平成10年度に発掘調査を行い、遺物整理および報告書作成は平成11年度に行うことで合意し協定を締結した。

第２節　調査の方法と経過

調査対象面積は2,800㎡である。調査の方法は短期間で大きな面積を調査するということでコンピューターによる遺跡調査システムを採用した。現場の調査では使用しないが整理作業時に使用する為に調査区全体に10ｍ方眼の仮想グリッド（北から南へＡ～Ｇ、西から東へ１～12）を組み、光波測量器・コンピューターを利用し遺物の取り上げ、遺構の図化を行った。また、遺物の出土状況の図化に関しては平板測量、簡易遣り方実測を用い光波測量器と連携し迅速な調査を心がけた。

調査は平成11年２月１日に着手し、重機により40～50㎝の厚さの耕作土を除去し鋤簾当により確認精査し各遺構の調査を進めた。調査地は櫛形山より流入する大小河川によって形成された複合扇状地上にあるために礫質の土壌であり、土が重く遺構の確認に手間取った。また、調査中に個人住宅の建設に伴う発掘調査が入り、この調査と同時に進行することとなった。このため発掘作業人員の確保や調査員のやり繰り等の問題があり、調査の進展に重大な影響を及ぼした。調査を行っていく中で古墳時代の竪穴状遺構と近世～近代の粘土採掘坑が確認された。前述したように調査には人的および時間的な余裕がなくなっていたことから古墳時代の遺構の調査をメインとし、近世～近代の遺構については残りのよい部分・重要だと思われる部分のみの調査しか行えなかった。

古地図について（第２図）

この古地図は寛政年間（約200年前）の本調査区一帯を描いている。地図上で黒く描かれている部分は原野で調査区の1部もここに掛かっている。この原野は土地の人の話だとクヌギや松が主体になっていたそうである。

（河野竜也氏所蔵）

第Ⅱ章　遺跡の概観

第１節　地理的環境

本遺跡が立地する櫛形町は、甲府盆地の西部に位置し南アルプスの前衛山である櫛形山の東麓に発達した町である。町域は地形的には東から櫛形山を中心とする山地、櫛形山東麓の落下地塊によって形成された市之瀬台地、御勅使川が作り出した日本有数の複合扇状地の３つに大きく区分される。

櫛形山より流れ出る御手洗川・深沢川・漆川・市之瀬川・秋山川当の諸河川は上流で18～20°という急激な勾配で櫛形山を下り、大量の土砂を削って台地の出口の谷部に至ってそれを堆積させ御勅使川の作り出す扇状地とあいまって複雑な複合扇状地を形成している。これら扇状地の扇央部にあたる沢登・桃園・小笠原・下市之瀬・吉田などの地域は古くより「原方」と呼ばれており、特に山側の端部は「原七郷」と言われ「原七郷は月夜も焼ける」といわれる程に地下水位が深く水に乏しい乾燥地帯となっている。本遺跡はこの「原方」に位置し、御勅使川扇状地扇端部に立地する。明治～大正時代にかけては綿の生産が行われ、その後昭和30年代後半まで桑がつくられ、潅漑施設の整った現在では果樹園として桃やスモモの生産が盛んな場所となっている。また、本遺跡より南側の扇状地端部では地下にしみこんだ水が湧き出す湧水点が存在し、若草町の鏡中条・十日市場・甲西町の江原・鮎沢等と弧状に連なる湧水列をなしている。この湧水列から低部は水が豊富なことから「田方」とよばれ文字通り水田が主体となる地域で、前述の「原方」と異なった地誌的様相を呈している。

第２節　歴史的環境

櫛形町は釜無川の右岸、櫛形山の山裾に発達した町で地形的に西から山地・台地・扇状地と大きく三分される。町内には現在約260の遺跡が確認されているが、そのほとんどが台地と扇状地に認められる。

市之瀬台地上では旧石器時代・縄文時代・弥生時代・古墳時代・平安時代・中世の各時代に渡る遺跡が見られる。六科丘遺跡㉗・長田口遺跡㉓・長田Ａ遺跡㉒では旧石器時代のナイフ形石器が発見されたことから、当該期の遺跡が台地上に存在すると予想され、従来、調査時にあまり注意が払われなかったローム層中にも注意を払う必要があるだろう。六科丘遺跡・曽根遺跡⑧・大畑遺跡㉜で縄文時代早期・前期の遺物が発見されているが台地上において本格的に遺跡が増えるのは縄文時代中期からである。上の山遺跡㉛・長田口遺跡㉕・古屋敷遺跡㊲では当該期の遺物および遺構が発見されている。ただ、現在までの調査の所見では市之瀬台地は集落を営むには良好な台地であると考えられるが曽根丘陵や八ヶ岳南麓における縄文時代中期の遺跡のように大規模な集落は発達していなく、むしろ鋳物師屋遺跡㊶や北原Ｃ遺跡①のように台地際の扇状地に中期の大きな集落が認められるようである。中期以降では長田口遺跡で後期初頭～前葉にかけての配石遺構や晩期後半の浮線文土器が発見されている。

弥生時代には長田口遺跡や上の山遺跡で弥生時代中期の土器片が発見されているが台地上において本格的に生活が行われるのは後期になってからである。上の山遺跡・上ノ東遺跡㉞・六科丘遺跡・長田口遺跡では当該期の集落や方形周溝墓などが発見されている。特に長田口遺跡では長軸が11ｍ以上もある大型住居址や東日本では４例目となるペンダント状に２次加工された後漢鏡片が出土し、当該期における拠点的な集落といえるであろう。この台地上の集落は古墳時代の早いうちには廃絶され、台地上には前期～中期にかけての物見塚古墳㊱・六科丘古墳㉖・上ノ東古墳㉟・無名墳⑩などの古墳が甲府盆地を望むように台地を構成する丘陵の先端に築かれるようになる。古墳時代の集落は扇状地に展開されるようになり台地上には営まれなくなるが平安時代になると上の山遺跡において住居が発見されており、台地上の開発が再び行われるようである。中世になると上野氏・大井氏の椿城㉝・秋山氏の中野城など甲斐源氏ゆかりの氏族が拠ったとされる城郭が台地上に築かれる。また、上の山遺

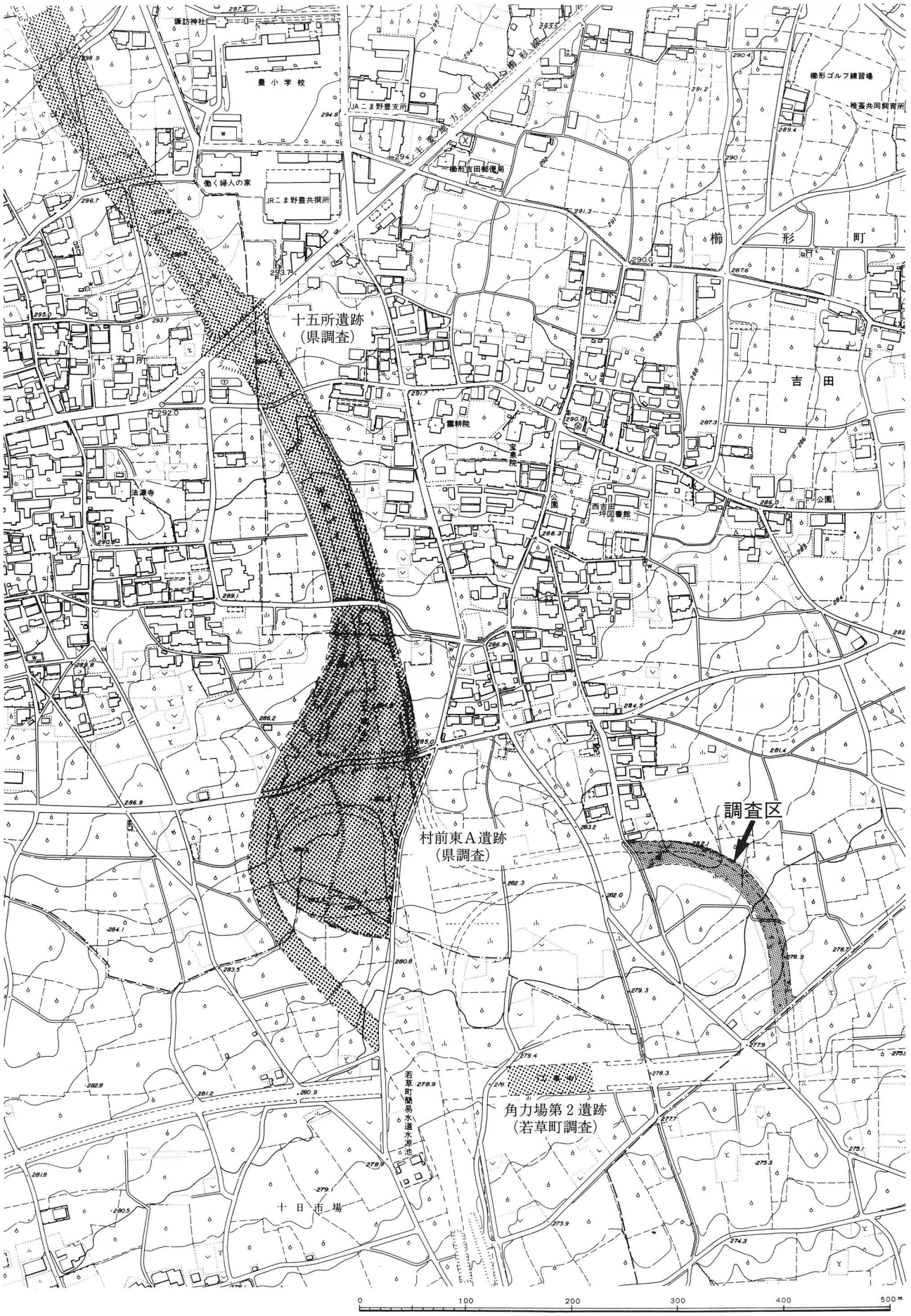
跡・長田口遺跡では中世の地下式土坑が調査されている。

さて、扇状地においては国指定の重要文化財の土偶が出土した鋳物師屋遺跡・〆木遺跡㊷・北原C遺跡のように台地際扇状地で縄文時代中期の集落が調査されており、従来縄文時代の遺跡が存在しないと考えられていた御勅使川複合扇状地にて今後も縄文時代の遺跡が発見される可能性はあるといえるだろう。しかし、扇状地扇央部から扇端部、さらに沖積低地における本格的な開発は弥生時代に入ってからであり、特に中部横断道・甲西バイパス建設に伴う発掘調査によって大規模に且つ従来調査の出来なかった深い面までも調査がなされ、扇状地に於ける遺跡の様相が少しずつ明らかになってきた。その結果、この扇状地の開発が進むのは弥生時代後期からだと言われてきたが、十五所遺跡⑰・二本柳遺跡㊺・油田遺跡㊼・大師東丹保遺跡㊷などでは弥生時代中期の遺物が発見され、また、向河原遺跡㊻では当該期の水田跡が調査されるなど、稲作の開始によって沖積地へと進出した遺跡が厚い扇状地堆積物に覆われて残されている事がわかってきた。弥生時代後期では住吉遺跡㊿・大師東丹保遺跡・十五所遺跡・村前東A遺跡⑱・枇杷B遺跡⑳などの遺跡が調査されている。特に十五所遺跡では方形周溝墓が数基発掘され、隣接する村前東A遺跡の墓所だと考えられている。

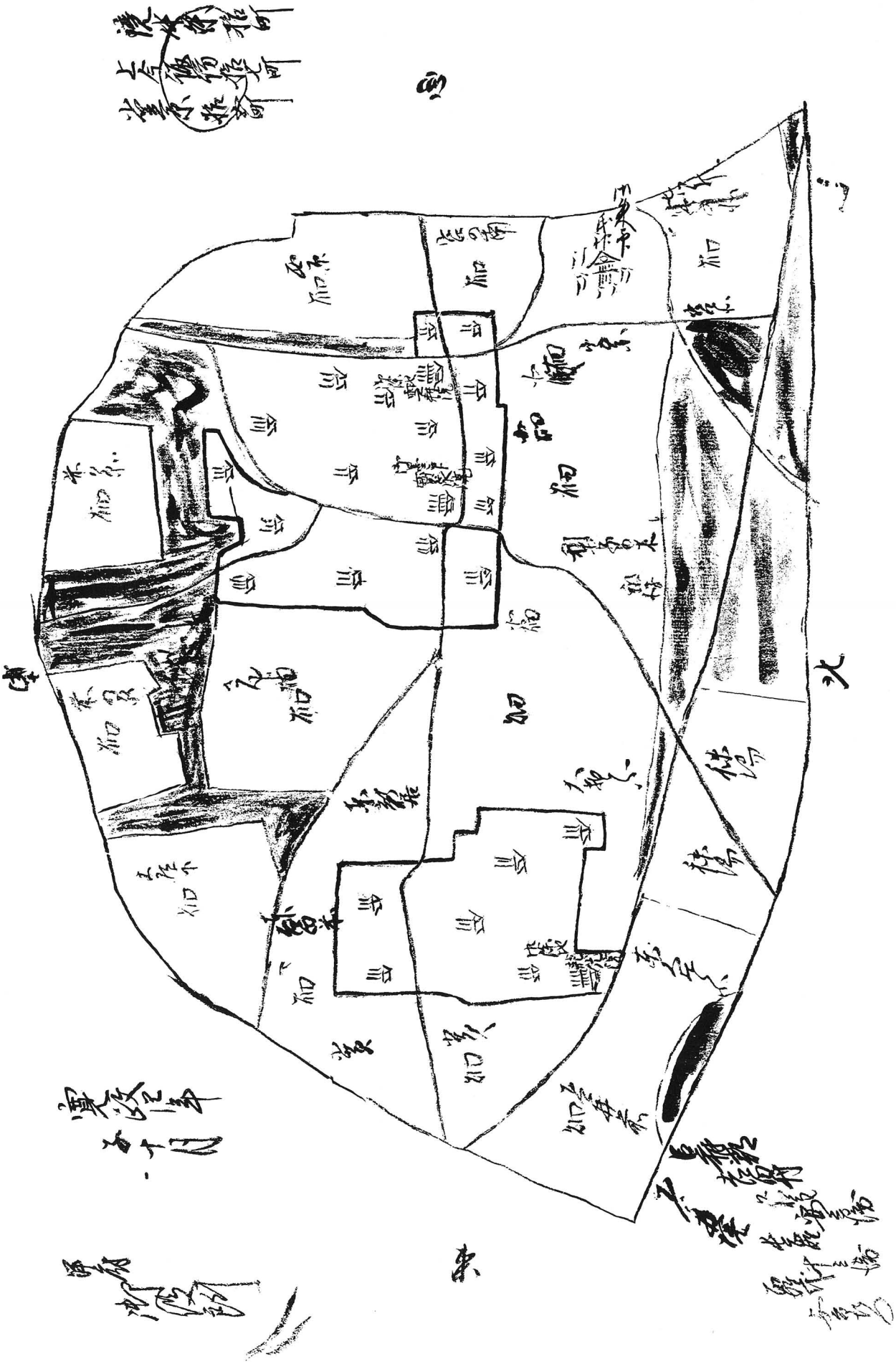
古墳時代では扇状地端部～沖積地にかけての開発はさらに進み、142軒の住居址が検出された村前東A遺跡・角力場第2遺跡⑲など前期の集落では東海系のS字口縁台付甕が多く出土し、古墳時代の社会的な変動期の様子が窺える。村内遺跡㊾では中期、新居道下遺跡㊹では後期の住居跡がそれぞれ調査されている。大師東丹保遺跡では氾濫による砂礫層下に埋没していた4世紀末～5世紀初頭の古墳が発見され、前期の古墳が台地先端の眺めのいい場所に占地する中でこの古墳は扇状地に立地しており、台地上の古墳との関係が注目される。また、上村古墳㊸・狐塚古墳㊴・鋳物師屋古墳㊵などのように横穴式石室を持つ後期古墳は台地を下りきった扇状地の山際の端部に築かれている。

律令体制化の本地域一帯は『和妙類聚抄』に所載される甲斐国・巨摩郡九郷の一つである「大井郷」に比定されており、奈良～平安時代の集落としては新居道下遺跡、村前東A遺跡、鋳物師屋遺跡、枇杷B遺跡、角力場第2遺跡、水田址が二本柳遺跡で調査され、当該期の様相がわかってきた。

中世にはいると甲斐源氏の一族が台頭して、小笠原氏の氏祖小笠原長清が拠ったとされる（伝）小笠原館跡㉙や加賀美遠光の拠ったとされる法善寺㊸など甲斐源氏の一派である各氏の居館跡が本地域にある。



第1図　遺跡周辺地形図（1/5,000）

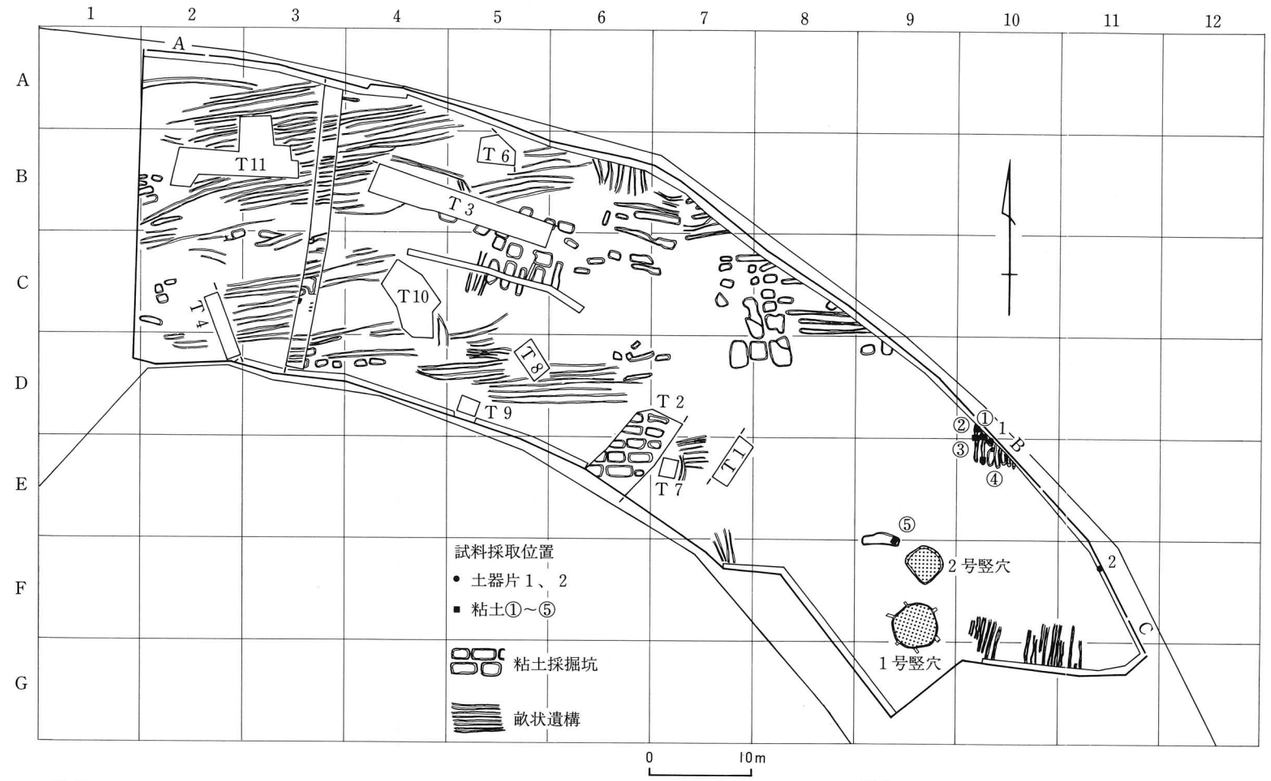


第２図　遺跡一帯の古地図

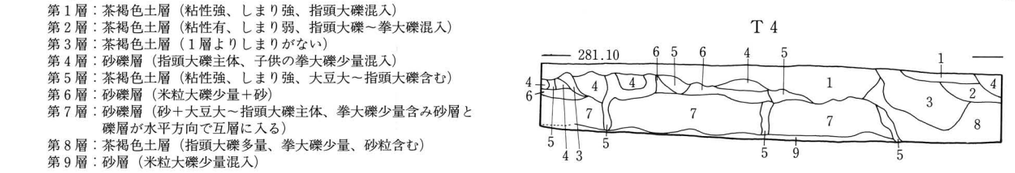
A．前原G

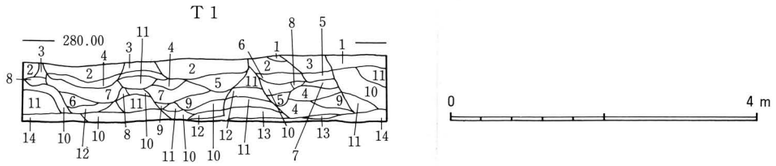
1．北原C　2．北峯A　3．北新居C　4．丸山A　5．御崎古墳　6．伝嗣院原B　7．伝嗣院原C　8．曽根　9．西原　10．無名墳　11．永面B
12．宮原　13．鼠作A　14．赤面C　15．吉田西原A　16．八田畑A　17．十五所　18．村前東A　19．角力場第2　20．枇杷B　21．東原B　22．長田A
23．長田口（県）　24．新居田A　25．長田口（町）　26．六科丘古墳　27．六科丘　28．新居田B　29．（伝）小笠原氏館　30．コウモリ塚古墳　31．上の山
32．大畑　33．椿城　34．上ノ東　35．上ノ東古墳　36．物貝塚古墳　37．古屋敷　38．東久保A　39．狐塚古墳　40．鋳物師屋古墳　41．鋳物師屋
42．メ木　43．上村古墳　44．新居道下　45．二本柳　46．向河原　47．油田　48．中川田　49．村内　50．住吉　51．西川　52．大師東丹保　53．法善寺

第３図　遺跡位置図及び周辺遺跡分布図（1/25,000）

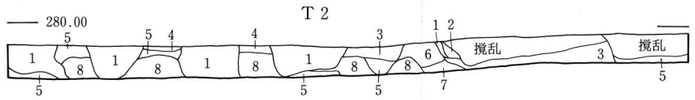


T4
第１層：茶褐色土層（粘性強、しまり強、指頭大礫混入）
第２層：茶褐色土層（粘性有、しまり弱、指頭大礫～拳大礫混入）
第３層：茶褐色土層（１層よりしまりがない）
第４層：砂礫層（指頭大礫主体、子供の拳大礫少量混入）
第５層：茶褐色土層（粘性強、しまり強、大豆大～指頭大礫含む）
第６層：砂礫層（米粒大礫少量＋砂）
第７層：砂礫層（砂＋大豆大～指頭大礫主体、拳大礫少量含み砂層と礫層が水平方向で互層に入る）
第８層：茶褐色土層（指頭大礫多量、拳大礫少量、砂粒含む）
第９層：砂層（米粒大礫少量混入）





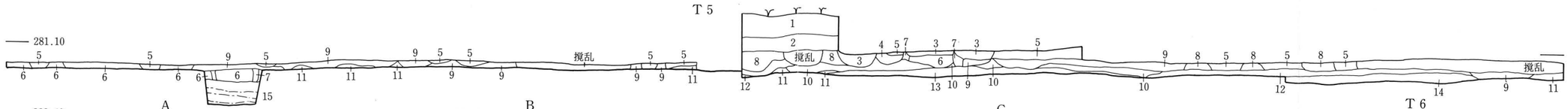
T1
第１層：茶褐色土層（粘性有、しまり強、粘質土＋指頭大礫）
第２層：砂礫層（指頭大礫主体層）
第３層：茶褐色土層（粘性有、しまり強、指頭大礫、粘質土含む）
第４層：茶褐色土層（粘性有、しまり強、米粒大礫、粘質土含む）
第５層：茶褐色土層（米粒大～指頭大礫、砂、粘質土を含む）
第６層：砂礫層（米粒大～指頭大礫多量含み砂混入）
第７層：茶褐色土層（米粒大～大豆大礫層＋粘質土、しまり強）
第８層：礫層（米粒大礫主体）
第９層：茶褐色土層（米粒大～指頭大礫多量＋粘質土）
第10層：砂層（米粒大礫混入）
第11層：砂層
第12層：砂礫層（指頭大～５cm程の礫＋砂）
第13層：黒褐色砂質土層（大豆大礫混入）
第14層：黒褐色砂質土層

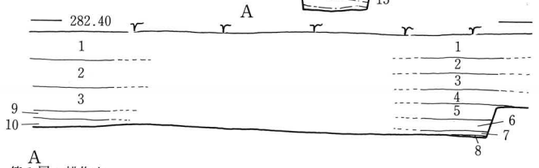


T2
第１層：茶褐色含礫層（茶褐色粘質土＋小礫）粘土採掘坑
第２層：砂礫層（米粒大～指頭大礫＋茶褐色粘質土）
第３層：砂礫層（砂が多量、指頭大礫含む）
第４層：砂礫層（米粒大～指頭大礫主体）
第５層：砂礫層（砂＋米粒大礫少量）
第６層：砂層（指頭大～米粒大礫含む）
第７層：砂層（米粒大礫少量含む）
第８層：砂層

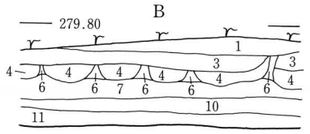
T3
第１層：黒褐色土層（粘性強、しまり強、小豆大礫多量、３～５cm礫中量混入）
第２層：黄褐色砂質土層
第３層：黄褐色砂質土層（指頭大礫含む）
第４層：礫層（指頭大～３cm程の礫主体）
第５層：茶褐色土層（粘性有、しまり有、指頭大礫中量混入）
第６層：黄褐色土層（粘性有、しまり強、指頭大～小豆大礫混入）
第７層：黄褐色土層（粘性有、しまり有、小豆大礫多量混入）
第８層：砂礫層（大豆大～指頭大礫主体、茶褐色粘質土混入）
第９層：砂礫層（指頭大礫主体）
第10層：礫層（拳大礫主体、茶褐色粘質土混入）
第11層：茶褐色土層（大豆大礫中量、３cm程の礫少量混入）
第12層：暗褐色土層（粘性有、しまり有、３cm程の礫多量混入）
第13層：礫層（指頭大礫主体、拳大礫含む）
第14層：礫層（指頭大～大豆大礫主体）
第15層：砂礫層（大豆大礫主体＋砂）
第16層：砂礫層（小豆大～指頭大礫主体＋砂）
第17層：砂礫層（米粒大～指頭大礫主体、拳大礫少量含む）
第18層：砂層
第19層：砂礫層（米粒大～小豆大礫主体層、砂層の互層から成る）

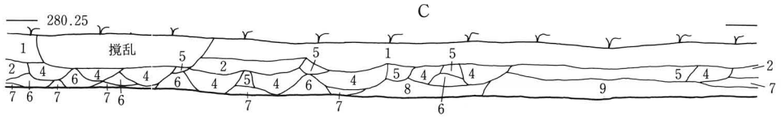
T5
第１層：耕作土
第２層：暗褐色土層（粘性有、しまり有、指頭大礫中量混入）
第３層：黒褐色土層（粘性やや有、しまりやや弱、指頭大礫中量、拳大礫少量混入）
第４層：黒褐色土層（３層より拳大礫が多く、しまりなし）
第５層：茶褐色土層（粘性強、しまり強、大豆大礫含む）
第６層：砂礫層（指頭大礫主体）
第７層：茶褐色土層（粘質土＋指頭大礫）
第８層：黒褐色土層（粘性強、しまり強、指頭大礫多量、３～５cm程の礫少量遺物包含層）
第９層：暗茶褐色土層（粘性有、しまり強、指頭大～大豆大礫、黒褐色土混入）
第10層：茶褐色土層（粘性有、しまり強、小豆大～指頭大礫含む）
第11層：礫層（拳大礫主体）
第12層：暗茶褐色砂質土層（粘性有、しまり強、大豆大礫微量混入）
第13層：茶褐色砂質土層（粘性無、しまり弱）
第14層：茶褐色砂質土層（粘性やや有、しまり有、橙褐色粒子、黒褐色土ブロック混入）
第15層：砂礫層（砂層＋米粒大礫主体層が水平方向に互層に入る）



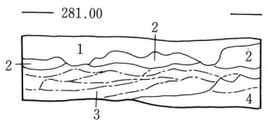


A
第１層：耕作土
第２層：黒褐色土層（粘性有、しまり有、指頭大礫多量混入）
第３層：暗褐色土層（粘性有、しまり有、大豆大礫多量混入）
第４層：砂礫層（指頭大～小豆大礫主体、３cm程礫少量）
第５層：黄褐色土層（粘性強、しまり強、礫の混入がほとんど無い）
第６層：茶褐色土層（しまり強、小豆大礫多量混入）
第７層：茶褐色土層（しまり強、大豆大～小豆大礫多量混入）
第８層：茶褐色砂質土層（しまり強、小豆大礫少量混入）
第９層：砂礫層（小豆大～大豆大礫主体）
第10層：砂層





B、C
第１層：耕作土
第２層：暗茶褐色土層（小豆大～指頭大礫多量、黒褐色土少量混入）
第３層：黒褐色土層（粘性強、しまり強、指頭大礫混入）
第４層：黒褐色土層（粘性強、しまり強、指頭大～３cm程の礫少量混入）
第５層：黒褐色土層（４層より礫の混入が少ない）
第６層：茶褐色土層（粘性強、しまり強、指頭大礫混入）
第７層：黄緑色砂質土層（大豆大礫主体、指頭大～３cm程の礫少量、黒灰色土混入）
第８層：茶褐色砂質土層（子供の拳大礫多量混入）
第９層：茶褐色砂質土層（指頭大礫少量含み橙褐色粒子少量混入）
第10層：黄褐色砂質土層（粘性無、しまり強）
第11層：暗褐色土層（大豆大礫多量、３cm程の礫含む）



T6
第１層：黒褐色土層（粘性強、しまり強、大豆大～指頭大中量、子供の拳大礫少量混入）
第２層：黒褐色土層（粘性無、しまりやや有、大豆大礫少量混入）
第３層：砂礫層（大豆大～指頭大礫主体、子供の拳大礫含み、砂層が斜行する）
第４層：砂層

第４図　全体図・トレンチ配置及びセクション図（1/600・1/80）

第Ⅲ章　発見された遺構と遺物

第１節　古墳時代の遺構と遺物

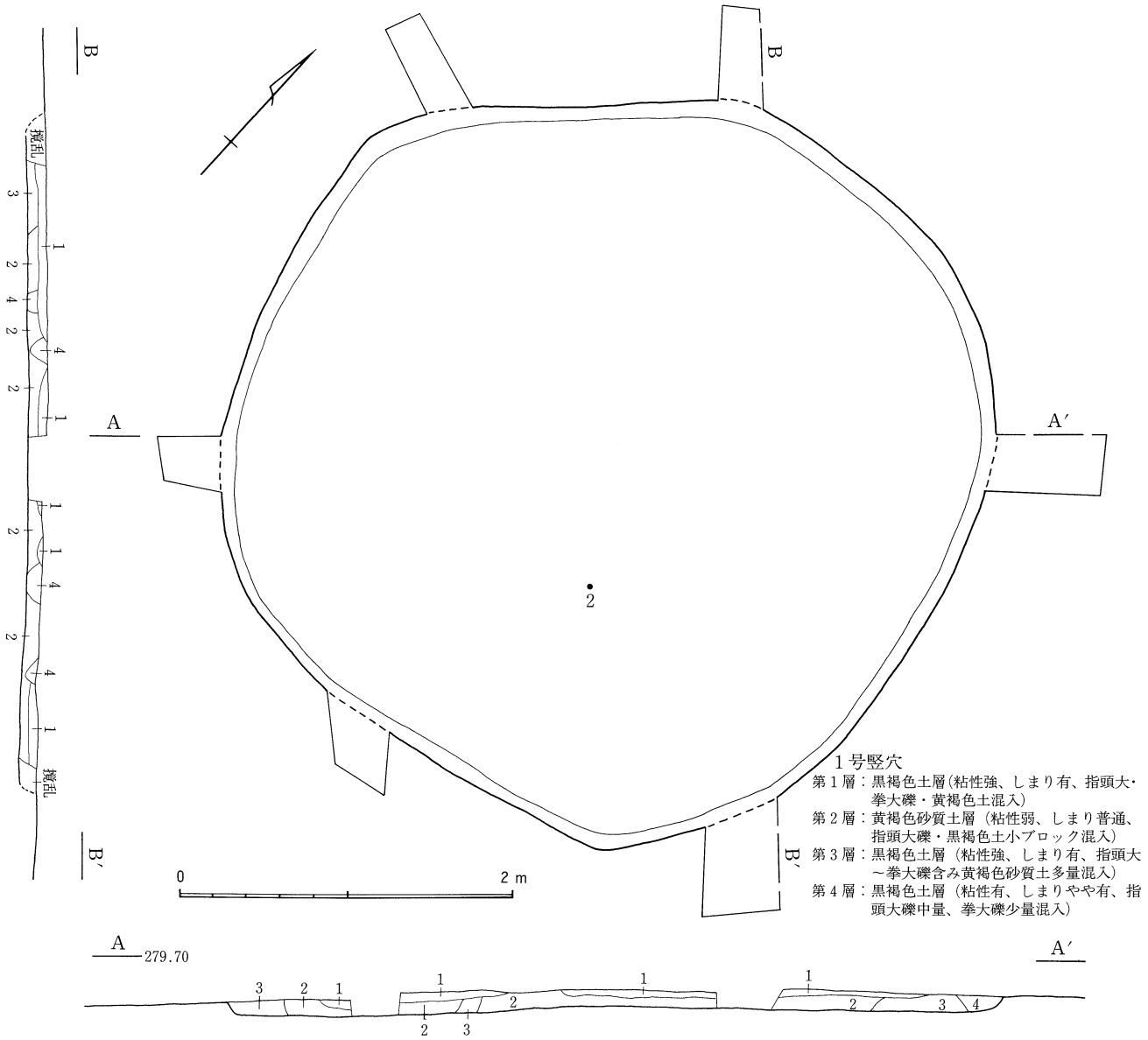
１）竪穴状遺構

１号竪穴状遺構（第５・６図、第１表、図版２）

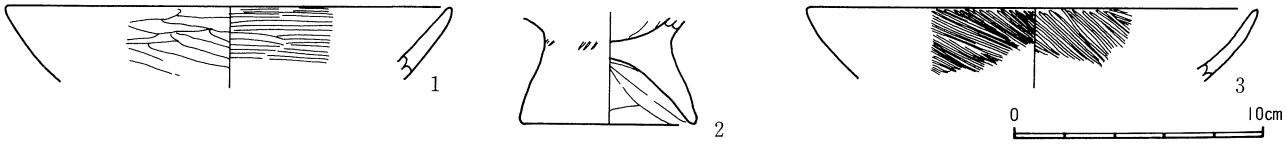
Ｆ－９区に位置し、北側に２ｍ離れて２号竪穴状遺構がある。上部に削平を受け、また部分的に撹乱を受けていることから遺存状態はあまりよくない。平面形態は円形を呈し、規模は長軸が4.5ｍ、短軸4.3ｍ、壁高は６～10㎝を測る。確認当初は住居址として調査をおこなったが、柱穴が確認出来ないこと、炉が存在しないことなどの理由から竪穴状遺構として取り扱うこととした。

底面はほぼ平坦で堅緻である。覆土は４層に分けられ、ほぼ自然な堆積状況を示していた。

出土遺物は全面に分布していたが細片が多く、図示できるものがきわめて少ない。覆土上層から古墳時代前期の土器を何点か確認している。



第５図　１号竪穴状遺構（1/40）



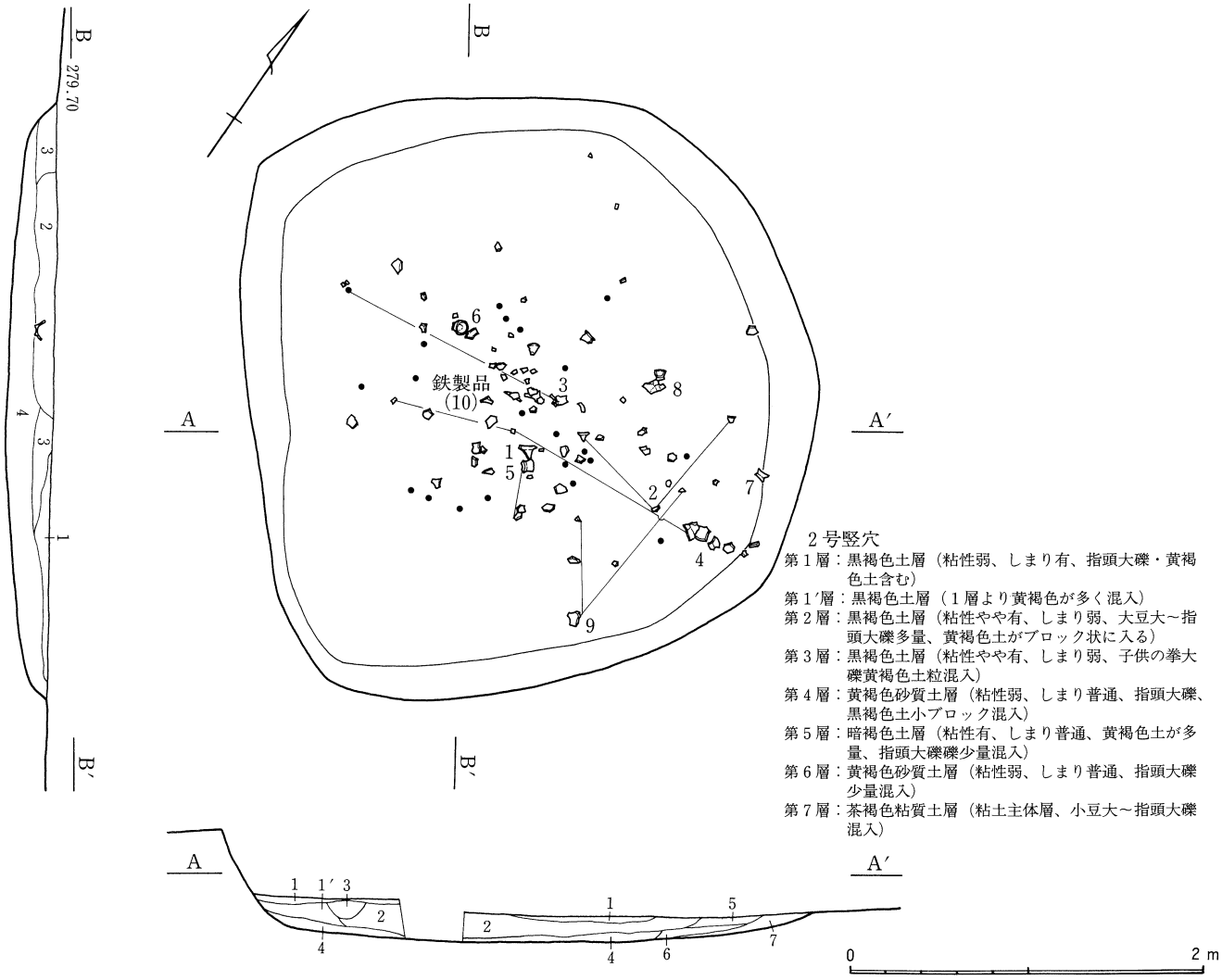
第６図　１号竪穴状遺構出土土器（1/3）

第１表　１号竪穴状遺構出土遺物観察表

1	甕	A：l（17.6）、h（3.0）。B：口縁部破片。C：外面－丁寧なヨコヘラミガキ。内面－ヨコハケ。D：白石粒多量に含む。E：良。F：橙色（2.5YR6/8）。
2	台付甕	A：b6.7、h（4.3）。B：脚部1/2。C：外面－ヨコナデ。内面－胴部、脚部ともナナメ方向のヘラナデ。D：白石・雲母多量に含む。E：良。F：外面くすんだ橙色（2.5YR6/6）、内面橙色（5YR7/6）。
3	高　坏	A：l（17.8）、h（2.9）。B：口縁部破片。C：内外面ともに細かなヘラミガキ（単位を持つ）。D：白石粒多量に含む。E：良。F：外面にぶい赤褐色（5YR4/3）、内面橙色（5YR6/6）。

２号竪穴状遺構（第７・８図、第２・３表、図版２・３）

Ｆ－９区に位置し、南側に２ｍ離れて１号竪穴状遺構がある。上部に大きく削平を受け、また部分的に撹乱を受けていることから遺存状態はあまりよくない。平面形態は不整円形を呈し、規模は長軸が3.7ｍ、短軸3.2ｍ、壁高は６～40cmを測る。確認当初は住居址として調査をおこなったが、柱穴が確認できないこと、炉が存在しないことなどの理由から竪穴状遺構として取り扱うこととした。



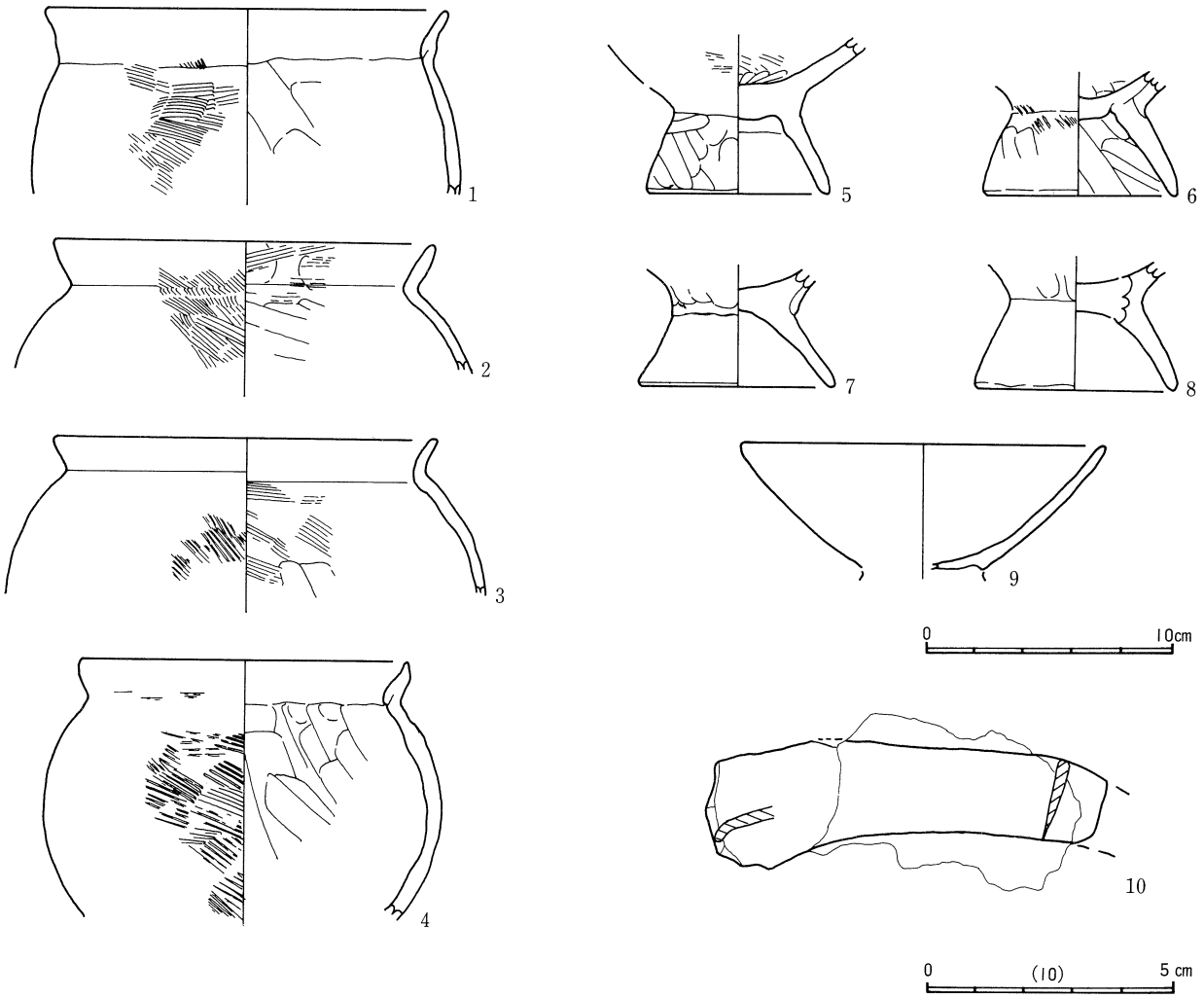
第７図　２号竪穴状遺構（1/40）

底面は若干の擂鉢状で、中央部が低くなっている。覆土は７層に分けられる。

出土遺物は非常に多く、遺構の全域において底面直上から覆土上層に至るまで土器片が検出された。細片が多く、同一個体の破片が広範囲に散乱していること、上層の遺物と下層の遺物において時期差がほとんど認められないことから、短期間に土器を投げ込み、人為的に埋め戻した可能性が高い。

また住居址ほぼ中央部、床面直上から鉄製鎌No.10が出土している。刃弦長が現存で8.2cm、刃幅2.1～1.6cmと小ぶりなもので、刃は内湾して曲がる曲刃である。断面は楔形の両刃と思われる。身の基端はわずかに折り曲げられている。

時期は出土土器より古墳時代前期と考えられる。



第８図　２号竪穴状遺構出土遺物（1/3・2/3）

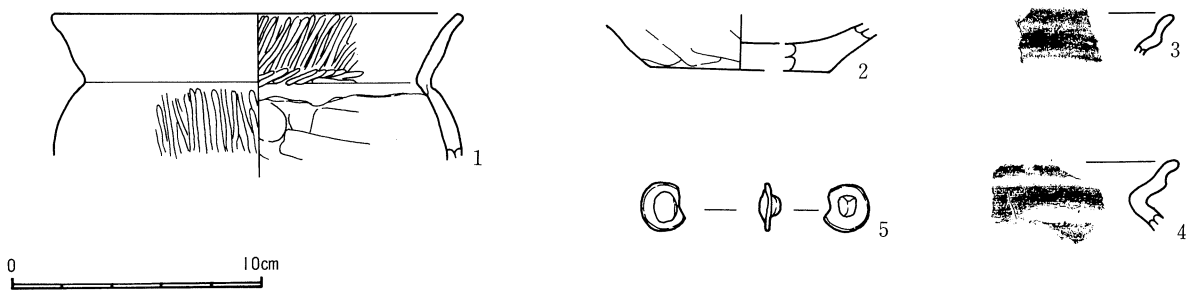
第２表　２号竪穴状遺構出土遺物観察表(1)

1	甕	A：l（16.2）、h（7.7）。B：口縁部～胴部上半破片。C：外面－口縁部ヨコナデ。胴部ヨコ方向のハケ残る。内面－口縁部摩滅により調整不明。胴部ナナメ方向のヘラナデ。D：微白石粒・赤色粒含む。E：良。F：橙色（5YR6/8）。
2	甕	A：l（15.4）、h（5.3）。B：口縁部～胴部破片。C：外面－口縁部ナナメハケのちヨコナデ。頚部～胴部ナナメハケ。内面－口縁部指押えのちヨコハケ。その後部分的にヨコナデ。胴部ナナメ方向のヘラナデ。D：密。E：良。F：外面にぶい赤褐色（2.5YR5/4）、内面明赤褐色（2.5YR5/6）。
3	甕	A：l（15.4）、h（6.5）。B：口縁部～胴部破片。C：外面－口縁部ヨコナデ。胴部ナナメハケ。内面－口縁部ヨコナデ。胴部上半指押えのちナナメハケ。以下ナナメハケのちヘラナデ入る。D：密。E：良。F外面淡黒褐色（7.5YR1/3）、内面橙色（7.5YR6/6）。

第３表　２号竪穴状遺構出土遺物観察表(2)

4	甕	A：l（13.2）、h（10.6）。B：口縁部～胴部1/4。C：外面－口縁部ヨコナデ。頸部～肩部ヨコハケのちヨコナデ。胴部ナナメハケ。内面－口縁部ヨコナデ。胴部指押えのちナナメ方向のヘラナデ。D：白石粒多量に含む。E：良。F：外面黄灰色（2.5YR4/1）、内面橙色（5YR6/6）。
5	台付甕	A：b7.3、h（6.5）。B：脚部4/5。C：外面－脚部摩滅しているがヘラナデの痕跡あり。胴部下半部分的にヨコハケ残る。内面－脚部摩滅していて調整不明。接合部付近にナデ。胴部下半ハケのち部分的にナデ。接合部付近には時計回りのナデ。D：微白石粒を多量に含む。E：良。F：外面黄褐色（10YR7/4）、内面にぶい橙色（7.5YR6/4）。
6	台付甕	A：b7.8、h（5.1）。B：脚部完形。C：外面－脚部下半ヨコナデ。接合部付近にナナメハケのちヘラナデが入る。内面－脚部ナナメ方向のヘラナデのちヨコナデ。胴部下半繊維束状工具によるナデ。D：密。E：良。F：暗橙色（5YR6/6）。
7	台付甕	A：b7.8、h（4.9）。B：脚部4/5。C：外面－脚部摩滅していて調整不明。接合部付近にタテハケのちタテ方向のヘラナデ。内面－摩滅著しく調整不明。D：白石粒・赤色粒多量に含む。E：良。F：外面くすんだ橙色（5YR6/8）、内面橙色（5YR6/8）。
8	台付甕	A：b（8.0）、h（5.3）。B：脚部2/5。C：外面－接合部付近にヘラナデ残る。内面－摩滅著しく調整不明。D：微細白石粒・赤色粒含む。E：良。F：にぶい橙色（7.5YR6/4）。
9	高　坏	A：l（14.8）、h（5.0）。B：口縁部部片。C：内外面ともに摩滅著しく調整不明。D：微細白石粒・赤色粒含む。E：良。F：橙色（5YR6/8）。

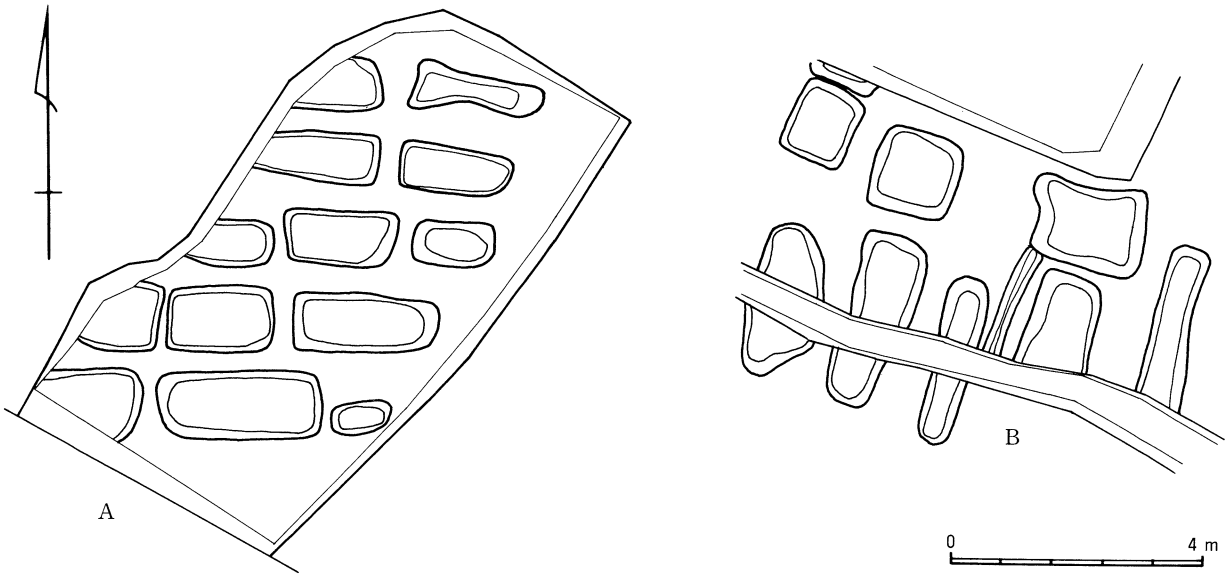
２）遺構外出土遺物（第９図、第４表、図版７）



第９図　遺構外出土土器（1/3）

第４表　遺構外出土遺物観察表

1	壺	A：l（16.2）、h（5.8）。B：口縁部～胴部破片。C：外面－口縁部ヨコナデ。胴部タテヘラミガキ。内面－口縁部ナナメヘラミガキ。胴部指押えのちヨコヘラナデ。D：密。E：良。F：明赤褐色（5YR5/8）。
2	壺	A：b（7.0）、h（2.1）。B：底部破片。C：外面－ナナメ方向のヘラナデ。内面－摩滅しているがヘラナデと思われる。D：挟雑物多量に含む。E：良。F：外面橙色（2.5YR6/8）、内面暗赤灰色（2.5YR3/1）。
3	S字甕	B：口縁部破片。C：内外面－ヨコナデ。D：金雲母多量に含む。E：良。F：にぶい褐色（7.5YR5/4）。
4	S字甕	B：口縁部破片。C：外面－口縁部ヨコナデ。肩部ナナメハケのちヨコハケ。内面－口縁部ヨコナデ。肩部ヨコハケ。D：黒色粒子多量に含む。E：良。F：外面橙色（7.5YR6/6）、内面にぶい黄褐色（10YR6/4）。
5	土製品	A：直径1.9×1.9、厚さ0.9。B：完形。C：内外面－ナデ。D：非常に密。E：良。F：橙色（5YR7/8）。



第10図　粘土採掘坑（1/120）

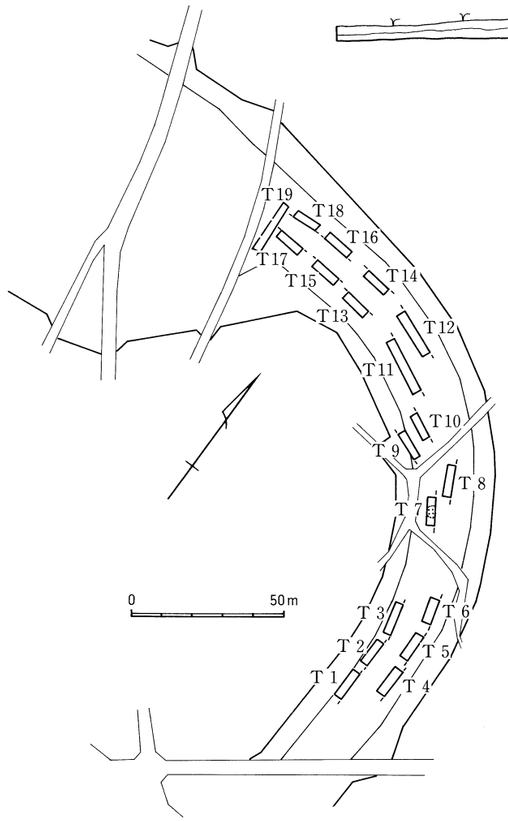
第２節　近世～近代の遺構

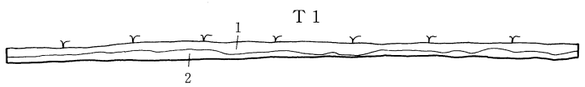
１）畝状遺構

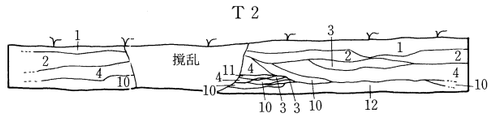
本調査区の北半分のほぼ全面と南側の一部において検出された。畝の規模については平均で幅20㎝、高さ20㎝、畝の間隔が60㎝を測る。畝は等間隔でほぼ平行な配列であり、調査区北半分については主に東西方向、南側においては南北方向に直線的に延びる。断面からの観察によると畝状遺構が粘土採掘坑を切っている。

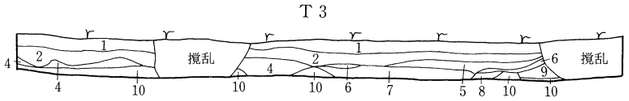
２）粘土採掘坑

調査区の西側において検出された。形状は長方形を呈し、長幅が90～240㎝、短軸が50～110㎝、深さ40～50㎝を測る。各採掘坑は幅が30～50㎝ある畝によって区別されており、数個～数十個の採掘坑が単位となって群をなしている（粘土採掘坑群Ａ・Ｂ）ものや、まとまりが認められなく単独で存在するものがある。粘土採掘坑群Ａは長軸がほぼ東西方向、粘土採掘坑群Ｂは長軸が約20°東に傾いている他、多くの採掘坑がほぼ東西方向に長軸をもつ。採掘坑の断面形は方形を呈し、底面は平らである。壁はほぼ垂直で直線的に上がるものと、緩やかなカーブを描き急角度で立ち上がるものとがある。覆土は主に指頭大程の礫が多く含まれる砂礫層と礫層が水平に互層になっているものや茶褐色土層と礫層が互層になっているものが見られるが、この覆土の堆積が自然流入によるものなのか人為的な埋め戻しによるものなのかは不明である。これらの粘土採掘坑は砂層中に掘り込まれており、調査区の上層部に認められる粘質土（粘土）を掘り込み、砂層に到達したために採掘を止めたものだと考えられる。

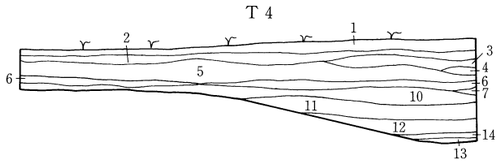


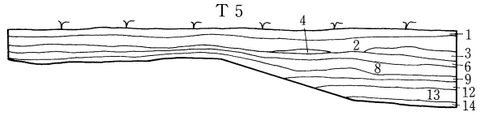


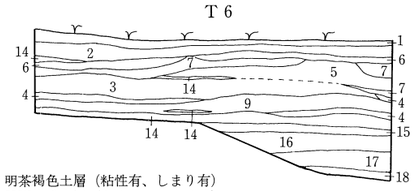




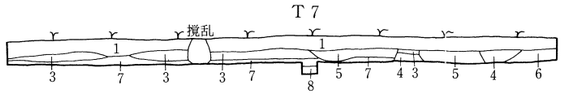
T 1、T 2、T 3
第 1 層：耕作土
第 2 層：礫層（指頭大礫主体）
第 3 層：砂礫層（砂＋小豆大礫）
第 4 層：砂礫層（指頭大礫主体、米粒大礫少量）
第 5 層：礫層（指頭大礫主体）
第 6 層：砂礫層（砂＋指頭大礫）
第 7 層：礫層（拳大～指頭大礫）
第 8 層：砂礫層（砂＋米粒大礫）
第 9 層：砂礫層（砂＋大豆大礫）
第10層：砂層
第11層：黒褐色土層（黒褐色土＋指頭大礫）
第12層：黒褐色土層（黒褐色土＋拳大～指頭大礫）

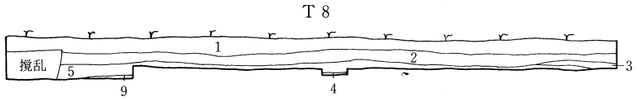






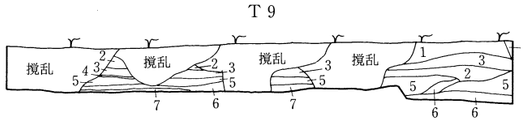
T 4、T 5、T 6
第 1 層：耕作土
第 2 層：茶褐色土層（礫混入）
第 3 層：礫層（拳大～指頭大礫）
第 4 層：砂礫層
第 5 層：礫層（拳大礫主体、茶褐色土混入）
第 6 層：黒褐色～暗茶褐色土層（礫混入）
第 7 層：茶褐色土層（礫多量混入）
第 8 層：砂礫層（指頭大礫主体、拳大礫含む）
第 9 層：砂礫層（指頭大礫主体、茶褐色土混入）
第10層：砂礫層（指頭大～大豆大礫）
第11層：礫層（指頭大礫主体、茶褐色土混入）
第12層：砂礫層（指頭大礫）
第13層：砂礫層（指頭大～小豆大礫）
第14層：砂層
第15層：砂礫層（砂＋米粒大礫）
第16層：明茶褐色土層（粘性有、しまり有）
第17層：明茶褐色土層（粘性弱、しまり弱）
第18層：明茶褐色土層（17層＋砂）

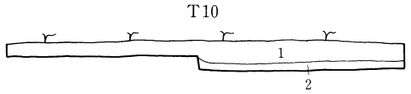




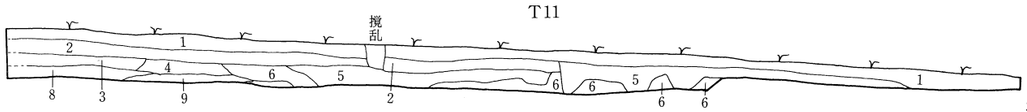
T 7、T 8
第 1 層：耕作土
第 2 層：暗茶褐色土層（礫混入）
第 3 層：黒褐色土層（礫少量、遺物色含層）
第 4 層：茶褐色土層（礫多量混入）
第 5 層：礫層（指頭大～拳大礫）
第 6 層：暗茶褐色土層（黒褐色土粒子、礫混入）
第 7 層：茶褐色土層（礫混入）
第 8 層：茶褐色土層（７層より礫の混入が多い）
第 9 層：砂層

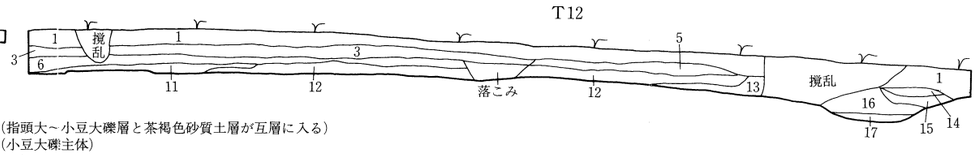
0　8 m



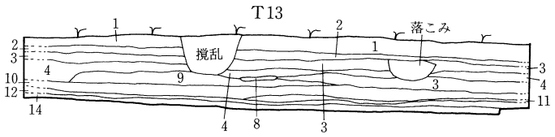


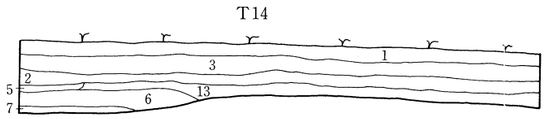
T 9、T10
第 1 層：耕作土
第 2 層：砂礫層（指頭大～小豆大礫主体、茶褐色土混入）
第 3 層：礫層（指頭大～小豆大礫）
第 4 層：砂礫層（砂多量、礫含む）
第 5 層：礫層（子供拳大～指頭大礫）
第 6 層：砂層
第 7 層：砂礫層（小豆大礫主体、指頭大礫含む）



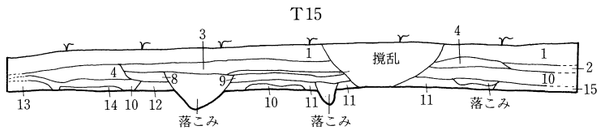


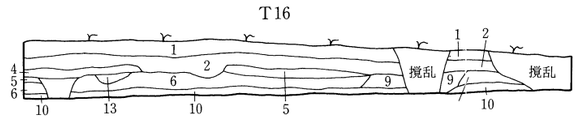
T11、T12
第 1 層：耕作土
第 2 層：暗茶褐色土層（指頭大礫含む）
第 3 層：黒褐色土層（礫混入）
第 4 層：黒茶褐色土層（礫混入）
第 5 層：礫層（指頭大～拳大礫、黒褐色土混入）
第 6 層：礫層（指頭大～拳大礫）
第 7 層：茶褐色土層（粘性有、しまり有）
第 8 層：礫層（３cm程の礫主体、明褐色土混入）
第 9 層：明褐色土層（粘性有、しまり有、礫混入）
第10層：礫層（指頭大礫主体）
第11層：明茶褐色土層（砂質土が混入）
第12層：明茶褐色土層（礫少量含む）
第13層：茶褐色土層（黄色砂礫が多量混入）
第14層：礫層（拳大礫主体）
第15層：砂礫層（指頭大礫＋砂）
第16層：砂礫層（指頭大～小豆大礫層と茶褐色砂質土層が互層に入る）
第17層：砂礫層（小豆大礫主体）

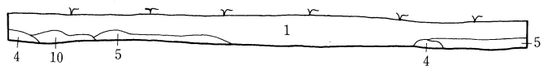


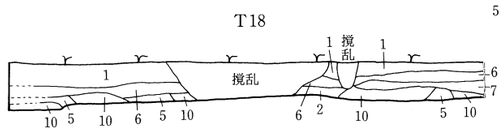


T13、T14
第 1 層：耕作土
第 2 層：黒褐色土層（礫少量混入）
第 3 層：暗茶褐色土層（礫含み黒褐色土混入）
第 4 層：暗茶褐色土層（礫多量混入）
第 5 層：礫層（指頭大～拳大礫）
第 6 層：礫層（指頭大～拳大礫、茶褐色土混入）
第 7 層：砂層（指頭大礫混入）
第 8 層：砂層
第 9 層：砂礫層（指頭大礫主体）
第10層：砂礫層（大豆大礫主体）
第11層：砂層（粒子粗）
第12層：暗茶褐色土層（粘性有、しまり有）
第13層：明茶褐色土層（粘性無、しまり有）
第14層：黒褐色土層（炭化物混入）

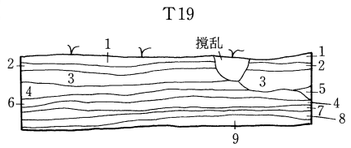








T15、T16、T17、T18
第 1 層：耕作土
第 2 層：茶褐色土層（礫混入）
第 3 層：礫層（指頭大～拳大礫）
第 4 層：礫層（指頭大礫）
第 5 層：礫層（指頭大～拳大礫＋茶褐色土）
第 6 層：礫層（指頭大～拳大礫）
第 7 層：砂層（粒子粗）
第 8 層：暗茶褐色土層（黒色粒子混入）
第 9 層：茶褐色土層（指頭大礫多量、黒色粒子混入）
第10層：砂礫層（粗い砂＋小礫）
第11層：暗茶褐色土層（細礫混入）
第12層：茶褐色土層（礫混入）
第13層：礫層（明褐色土多量混入）
第14層：明褐色土層



T19
第 1 層：耕作土
第 2 層：茶褐色土層（黒色粒子少量混入）
第 3 層：明褐色土層（礫少量混入）
第 4 層：礫層（指頭大～拳大礫）
第 5 層：明褐色土層
第 6 層：礫層（指頭大～拳大礫＋明褐色土）
第 7 層：明褐色土層（礫混入）
第 8 層：砂礫層（指頭大礫主体、明褐色土混入）
第 9 層：砂礫層（粗い砂）

第11図　試掘トレンチ配置及びセクション図（1/2,000・1/160）

第Ⅳ章　ま　と　め

第１節　古墳時代の遺構と遺物

今回の調査では古墳時代の遺構として、竪穴状遺構を２軒確認することができた。いずれも検出当初は住居址として調査をおこなったが、炉および柱穴が確認されず竪穴状遺構として取り扱うこととなった。調査区域内には同時代の土器が分布する場所が何箇所かあったが、畝状遺構による撹乱を受けており、遺構の検出には至らなかった。

今回確認された土器は古墳時代前期に位置付けられるものである。１号竪穴状遺構から出土した甕の口縁外面にはヘラミガキが施されており、また高坏の坏部も単位を持つ非常に細かなミガキが施されていた。2号竪穴状遺構から出土した甕はいずれも単純口縁で胴部中位に最大径を持つものである。口縁は「く」の字に短く立ち上がり、若干受け口状になるものもあり、独特の形態をなしている。いずれも編年をおこなう際のメルクマークとなるＳ字状口縁台付甕（以下Ｓ字）を伴っていないことから時期決定が困難であるが、高坏および甕の形態等から小林健二氏による編年のⅢ期に該当するものと考えられる。また遺構外から出土したＳ字も、口縁形態からⅢ期に該当すると考えられる。

２号竪穴状遺構から出土した鉄製の鎌は、刃弦長が現存で8.2㎝、刃幅2.1～1.6㎝と小ぶりなもので、刃は内湾して曲がる曲刃である。寺沢薫氏は「収穫と貯蔵」の中で、民具例などをもとに鎌の機能により刃弦長と刃幅が異なることに着目し、分類をおこなっている。今回出土した鎌は大きさから稲などの穂首収穫用の「穂切り鎌」に該当すると考えられる。

本遺跡の南側に位置する角力場第２遺跡もからもほぼ同時期の住居址が報告されているが、村前東Ａ遺跡に比べて住居址の数は極端に少なく、調査区東側より２軒の住居址が報告されている。さらに今回確認された竪穴状遺構と同様な遺構が検出されており、土器の出土状況も遺構が埋没する過程で投げ込んだ可能性が高く、今回確認された２号竪穴状遺構の状況に類似する。角力場第２遺跡では竪穴状遺構が住居址に近接して存在しており、本遺跡でも住居址の存在の可能性があることから、角力場第２遺跡同様に住居址とセットで機能する性格が考えられるが、今後資料の増加を待って、再度検討が必要であろう。

また、本遺跡の性格を位置付けるには、西側に位置する十五所遺跡、村前東Ａ遺跡を中心とする大規模な当該期の集落との関係を明らかにする必要があるが、今後一帯の調査が進むことにより徐々に明らかとなっていくであろう。

引用・参考文献

小林健二　1993　「外来系から在来系へ」『研究紀要９』山梨県考古学博物館ほか

小林健二　1993　「山梨県域の土器様相」『東日本における古墳出現過程の再検討』日本考古学協会新潟大会実行委員会

小林健二　1995　「山梨県出土の北陸系土器」『山梨県考古学論集Ⅳ』山梨県考古学協会

小林健二　1998　「甲斐における古式土師器の成立」『専修考古学』第７号

田中大輔　1998　『角力場第２遺跡』若草町教育委員会

寺沢　薫　1991　「収穫と貯蔵」『古墳時代の研究　４生産と流通Ⅰ』雄山閣

三田村美彦　1997　『村前東Ａ遺跡概報4』山梨県教育委員会

第２節　粘土採掘坑について

本遺跡においては検出された粘土採掘坑は若草町において生産がかつて盛んであった瓦の原料である粘土を採掘したものである。このような遺構は、近年大規模開発が沖積地に及ぶにあたり若草町から櫛形町にかけて発見されるようになった。近年、近世～近代にかけての遺跡調査の重要性が指摘される中で、これらの発見は地域の近代産業を明らかにする上で意義のあるものといえる。

若草町に於ける瓦生産の歴史は享保元年（1716）に開始されたと伝えられている。生産開始当初は農家が農業の合間に瓦焼きを行う程度の細々としたものであったが、甲府城に瓦が納められ、さらに明治に入り、日本で近代産業が盛んになるに従って瓦の需要が拡大し必然的に生産量も多くなってきた。その生産のピークは大正から昭和の初期にかけての時期で山梨県内産の瓦の約半分を生産していた。しかし、交通機関の発達により瓦の１大生産地である三州からの製品が流通してきたことや、原料である粘土が取りつくしのため不足を来たしてきたこともあり、家内工業的に小規模に生産していた各業者は廃業や転業を余儀なくされ、現在では「村おこし事業」として瓦が作られるにすぎなくなっている。（若草町史　1990）

本遺跡での粘土採掘坑は採掘坑ごとにある程度のまとまりが見られ、これらの長軸方向が同じで、ある程度のまとまりがある粘土採掘坑が１回におけるの粘土採掘を示すものであろう。しかし、全体的には採掘坑群の長軸方向にまとまりがなく計画的･組織的な採掘は行われていなかったようである。200年に近い瓦生産の歴史の中でこれらの粘土採掘坑が掘られた正確な時期は、遺物が全く出土していないことから不明であるが、土地の古老の話によると粘土の採掘が瓦の生産地である若草町加賀美周辺で行われていたものが生産が拡大するにつれて次第に櫛形町吉田・桃園と北進していき最終的には八田村下八田まで粘土の採掘が行われたことや、近隣の新居田遺跡では粘土採掘坑の坑底から大正から昭和初期にかけてのものと考えられる鋤簾が出土していることなどから本遺跡での粘土採掘坑が掘られた時期も瓦生産のピークを迎える大正から昭和初期にかけての可能性が高い。

引用・参考文献

上原真人　1997　『瓦を読む　歴史発掘⑪』講談社

河西　学　1997　「甲府城と加賀美瓦」『山梨考古学論集Ⅲ』山梨県考古学協会

清水　博　1995　『柿平Ｂ遺跡』櫛形町教育委員会

末木　健　1994　「山梨県に於ける近世瓦窯について」『山梨考古学論集Ⅲ』山梨県考古学協会

三田村美彦他　1999　『村前東Ａ遺跡』山梨県教育委員会

米田明訓　1998　『新居道下遺跡』山梨県教育委員会

若 草 町　1990　『若草町史』

附章　櫛形町前原G遺跡出土土器および粘土の胎土分析

川鉄テクノリサーチ株式会社
分析・評価センター
埋蔵文化財調査研究室
岡原　正明
伊藤　俊治

1．はじめに

山梨県櫛形町教育委員会殿が発掘調査し、櫛形町前原G遺跡から出土した土器片および粘土について、学術的な記録と今後の調査のための一環として化学成分分析を含む胎土分析の依頼があった。

調査の観点は、これら遺跡より出土した粘土製品が在地の粘土を原料として生産されたものか、外部から移入されたものかを明らかにすることにある。

2．調査項目および試験・検査方法と結果

(1)　外観の観察と写真撮影

試験用試料を採取する前に、試料の両面を㎜単位まであるスケールを同時写し込みで撮影した。外観の観察結果を一覧表に纏め20頁に、外観写真を23頁に示した。

(2)　重量計測

計重は電子天秤を使用して行い、小数点１位で四捨五入した。重量は次頁の表１に併記した。

(3)　蛍光Ｘ線分析法による化学成分分析

測定は堀場製作所製蛍光Ｘ線元素分析装置（MESA-500）を用いた。この装置は測定室が径150㎜、高さ70㎜程あるため、今回の試料はそのまま測定部に収納可能であった。それぞれの分析値を抜き出し20頁の表２に示した。

また、比較のための基準試料に国土地理院地質調査所の標準鉱物試料（JG-la）を用いた。

3．調査および考察結果

3-1．分析値の比較

表２の蛍光Ｘ線分光分析法による値を比較してみると、試料№１ツボおよび試料№２Ｓ字状口縁土器（以下土器という）の出土地点の２～３ｍ近傍と15ｍ程離れた地点の粘土との間にはシリカ（SiO_2）やアルミナ（Al_2O_3）を除く分析値に差が認められ、ツボや土器は近傍の粘土を用いて製作されたものではないと推定される。引き続き精度を高め検討を進める。

3-2．胎土と在地粘土の検討

前原Ｇ遺跡より出土したツボや土器片が在地の粘土を原料として生産されたものか、外部から移入されたものかを考察する。

標準鉱物試料（国土地理院地質研究所・JG-la）を基準に胎土中の微量元素としてカリウム（19-K）とカルシウム（20-Ca）、ルビジウム（37-Rb）とストロンチウム（38-Sr）等の含有比を考察する三辻利一[1]の方法を応用し進めることとした。

表１　試料の肉眼観察概要

試料No.	名　称	重量g	観　察　記　録
1	ツ　ボ	39.1	長さ70㎜×幅30㎜×厚み６㎜の土器片に口縁張出部32㎜が付いた小片試料である。内外面ともに赤く焼成され外面下部には煤が付着し黒くなっている。きめ細かな土を使用している。
2	Ｓ字状口縁土器	13.3	長さ45㎜×幅25㎜×厚み６㎜のＳ字状口縁部の付いた土器片である。土は黄土色で珪砂の細粒を含んだ粘土が使用されている。口縁部は薄く仕上げられており焦げ茶色になっている。
3	粘 土 ①	28.5	試料No.２の近傍２～３ｍ内から採取した粘土である。①～④の粘土の採取場所によって色調に差が認められる。①、③と④はほぼ同系の褐色である。砂礫が約40％近く混入している。
4	粘 土 ②	26.4	試料No.２の近傍２～３ｍ内から採取した粘土である。他試料に比べて黒褐色を呈している。砂礫が多く、その量は50％以上である。
5	粘 土 ③	32.2	試料No.２の近傍２～３ｍ内から採取した粘土である。径0.2～３㎜の比較的細かな砂礫の混入がある。重量比で30％位である。
6	粘 土 ④	33.8	試料No.２の近傍２～３ｍ内から採取した粘土である。砂礫が多くその量は50％以上であった。
7	粘 土 ⑤	34.3	No.２試料出土地点より12ｍ離れた地点で採取された粘土で、明るい黄土色を呈する。礫の混入が多く0.5～７㎜の砂礫が25.2ｇ粘土は6.9ｇで80％を砂礫が占めていた。
8	標準試料	JG-la	工業技術院地質調査所提供の標準試料で化学成分量が公認されている。データとの比較を行い指標元素：Sr、Rb、Ca、Kなどの存在比率を探る。

註：粘土試料には多量の砂礫の混入が認められたので、本来は試料をそのまま分析に供するのであるが、目視と篩い分けによって砂礫を除いて分析試料とした。

表２　櫛形町〔前原Ｇ遺跡〕分析試験結果（土器片・粘土）　（蛍光Ｘ線分光分析法）％

資料No.	SiO_2	Al_2O_3	CaO	MgO	Fe_2O_3	MnO	TiO_2	Na_2O	K_2O	SrO	Rb_2O	ZrO_2
1	64.0	22.6	2.18	0.99	7.67	0.054	1.02	0.051	1.44	0.022	0.009	0.022
2	68.3	22.3	0.58	1.11	2.91	0.009	0.994	3.06	0.739	0.005	0.004	0.017
3	69.6	15.2	0.99	2.88	7.46	0.141	0.899	0.081	2.70	0.017	0.016	0.034
4	69.4	15.6	1.16	2.75	7.46	0.142	0.886	0.015	2.55	0.018	0.018	0.032
5	68.9	16.4	1.16	1.34	8.39	0.158	0.918	0	2.66	0.021	0.020	0.044
6	71.0	15.1	1.39	0.69	8.19	0.175	0.901	0	2.54	0.025	0.022	0.035
7	67.4	15.9	1.46	2.17	9.00	0.215	0.952	0	0.79	0.023	0.017	0.034
JGla	76.8	13.4	2.10	0.92	1.86	0.058	0.254	0.815	3.73	0.021	0.021	0.014

まず、珪素（14-Si）の強度（cps/μA）を基準としカリウム、カルシウム、ルビジウムおよびストロンチウム元素の強度比を計算で求め（数値上段）、この値と標準鉱物試料で想定された強度とを比較し胎土中の元素存在比（下段）を求める。その結果を表３に示す。

表３　胎土中の標準試料に対する元素存在比

試料No.	K	Ca	Rb	Sr	K／Ca	Rb／Sr
1	0.180 0.534	0.307 1.48	0.112 0.455	0.284 1.07	0.361	0.425
2	0.0848 0.251	0.0768 0.371	0.0571 0.232	0.0866 0.327	0.677	0.709
3	0.291 0.774	0.119 0.575	0.173 0.703	0.201 0.758	1.35	0.927
4	0.278 0.825	0.141 0.681	0.198 0.805	0.211 0.796	1.21	1.01
5	0.291 0.864	0.141 0.681	0.217 0.882	0.232 0.875	1.27	1.01
6	0.266 0.789	0.162 0.783	0.255 1.04	0.266 1.00	1.01	1.04
7	0.315 0.935	0.183 0.884	0.185 0.752	0.252 0.951	1.06	0.791
8：JG-la	0.337	0.207	0.246	0.265	——	——

引き続き、表３の元素含有比K／Caを縦軸、Rb／Srを横軸にして図１を作成した。

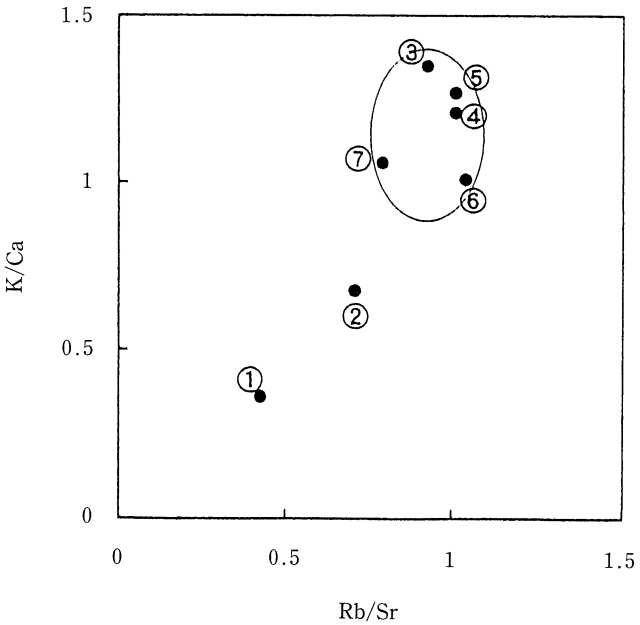


図１．櫛形町前原Ｇ遺跡出土のツボおよびＳ字状口縁土器と出土地点近傍の粘土の成分分布

図１から次のようなことが考察できる。

(1) 粘土③～⑦の分布は、採取した過程から当然のことであるが一群となっている。

(2) この中で、⑦が試料採取地点は他の粘土がツボや土器の出土地点とは異なり約15ｍ離れていることが原因してか、集団とやや離れている。

(3) したがって、ツボ①と土器②とは胎土成分が異なる粘土から作成されたものと推定できる。

(4) また、ツボ①と土器②との胎土成分の分布が異なるので、それぞれ別の粘土から作成された可能性が高い。なお、前述の(3)を含めこの問題について次の項で再度検討する。

3-3. ツボおよびＳ字状口縁土器の他産地との比較

ツボおよび土器が他産地から移入された可能性について検討する。

引き続き、これらの値を基にＫ／CaとRb／Srの元素比をプロットし図２に示した。

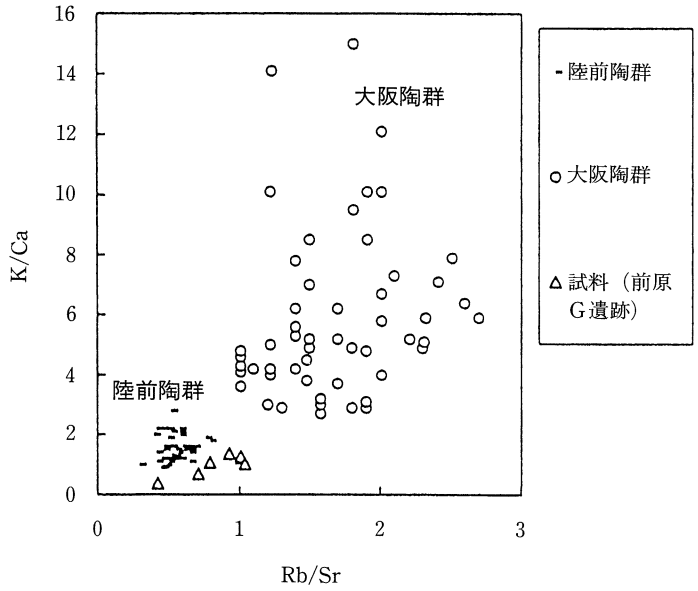


図２．櫛形町前原Ｇ遺跡出土品と近傍の粘土の化学成分分布位置
（須恵器産地との比較）

図２からつぎのようなことが考察できる。

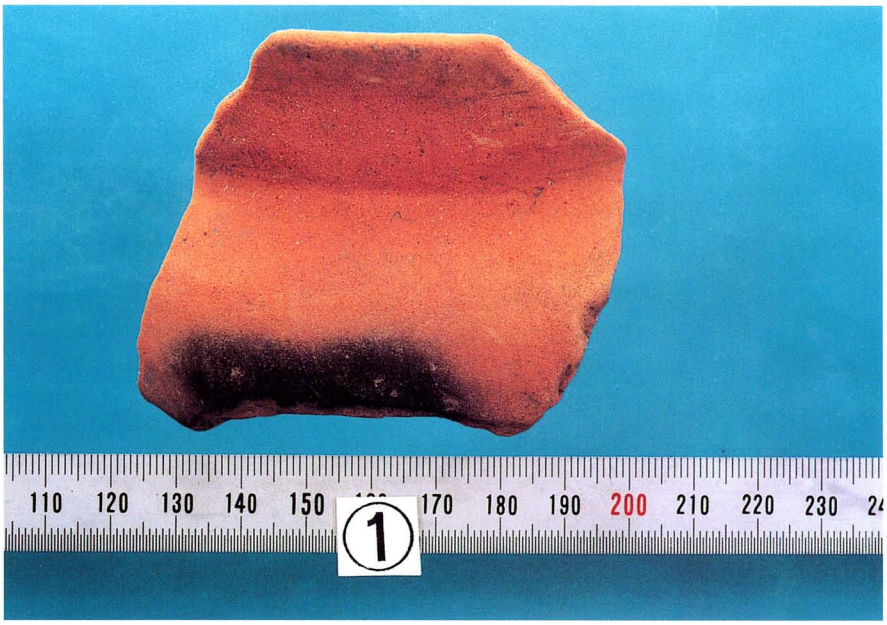
(1) 櫛形町前原Ｇ遺跡出土のツボと土器および粘土の化学成分分布位置は、たとえば大阪陶群のように分散することなく、陸前陶群と同様に比較的狭い範囲に纏まって分布している。

(2) したがって、ツボと土器は比較的近隣に位置した窯によって焼成された可能性が高い。しかし、試料①のツボの分布位置が他のものと乖離しているのでその生産地については櫛形町前原Ｇ遺跡近傍以外の可能性もあり、今後の調査に待ちたい。

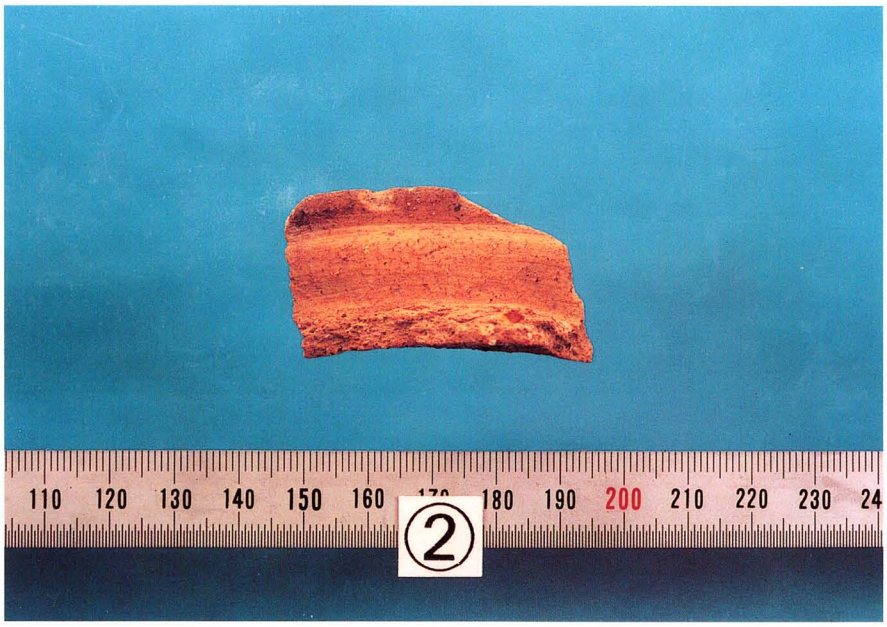
(3) 櫛形町前原Ｇ遺跡近傍の粘土やツボおよび土器の胎土成分は大阪陶群や陸前陶群とは異なり在地特有の成分ではないかと考えられる。

参考文献

1）三辻利一他：『須恵器のケイ光Ｘ線分析』；Ｘ線分析の進歩[10]61～65（1979）



試料NO. 1
ツボ片

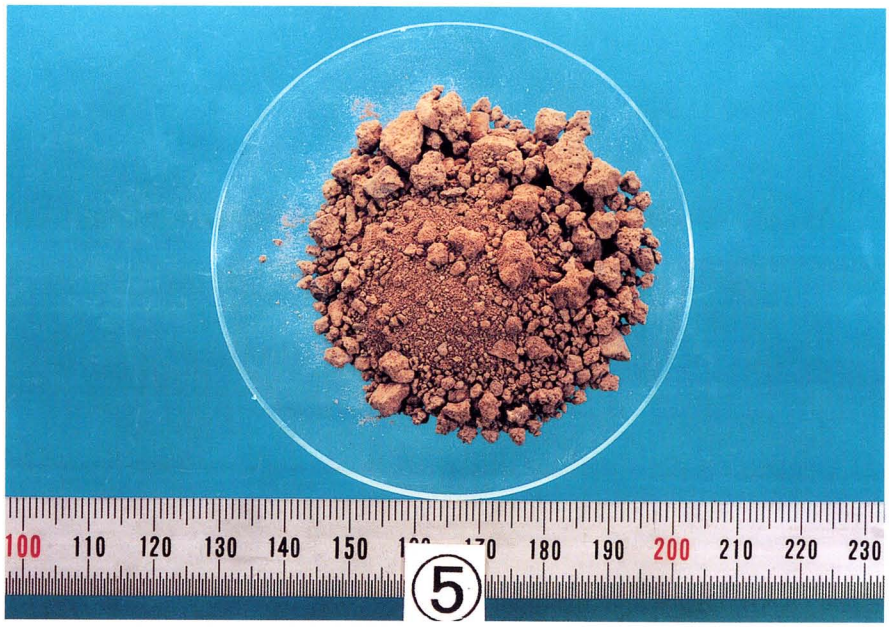


試料NO. 2
S字状口縁土器片

同　断面

試料NO. 3
粘土①

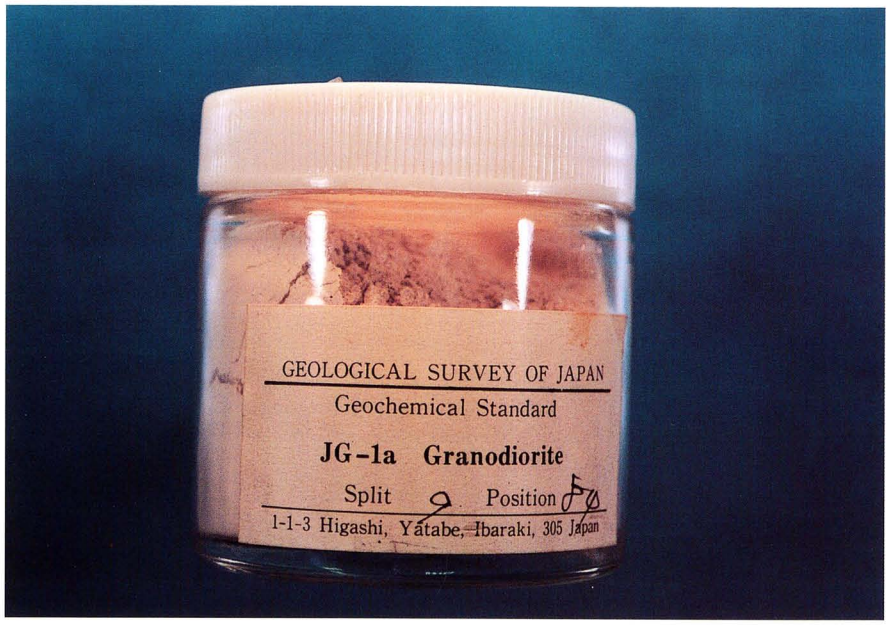
試料NO. 4
粘土②



試料NO. 5
粘土③

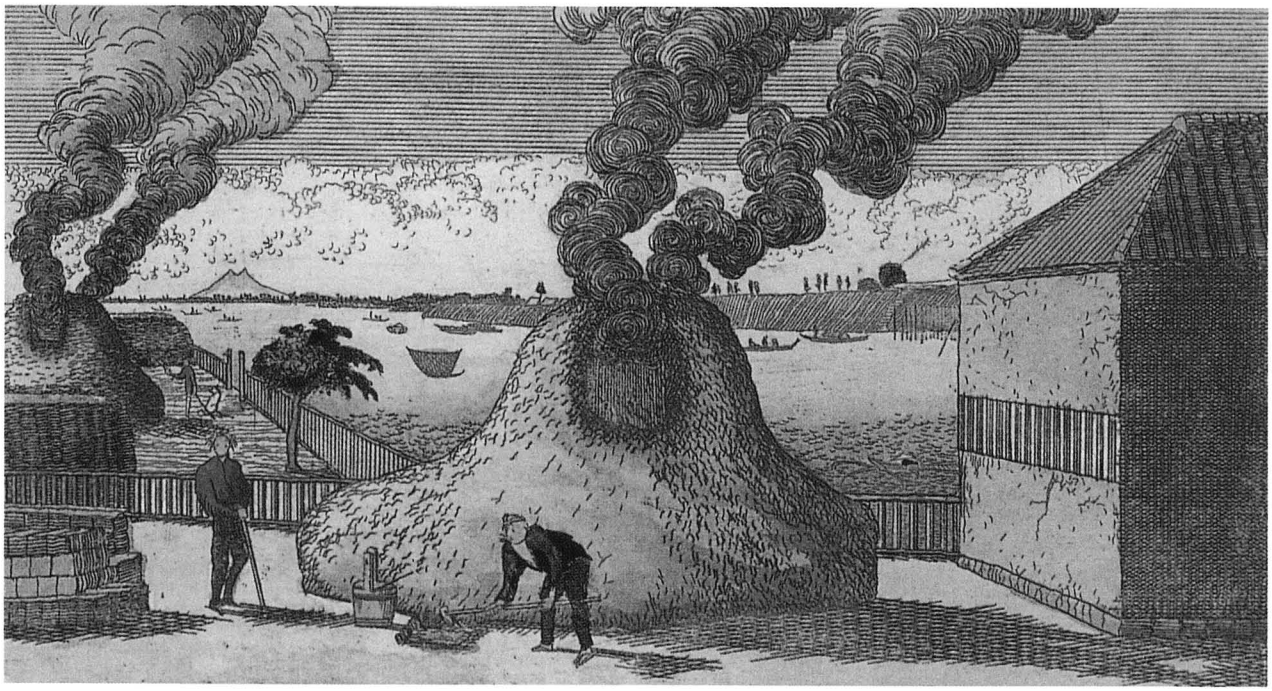
試料NO. 6
粘土④

試料NO. 7
粘土⑤

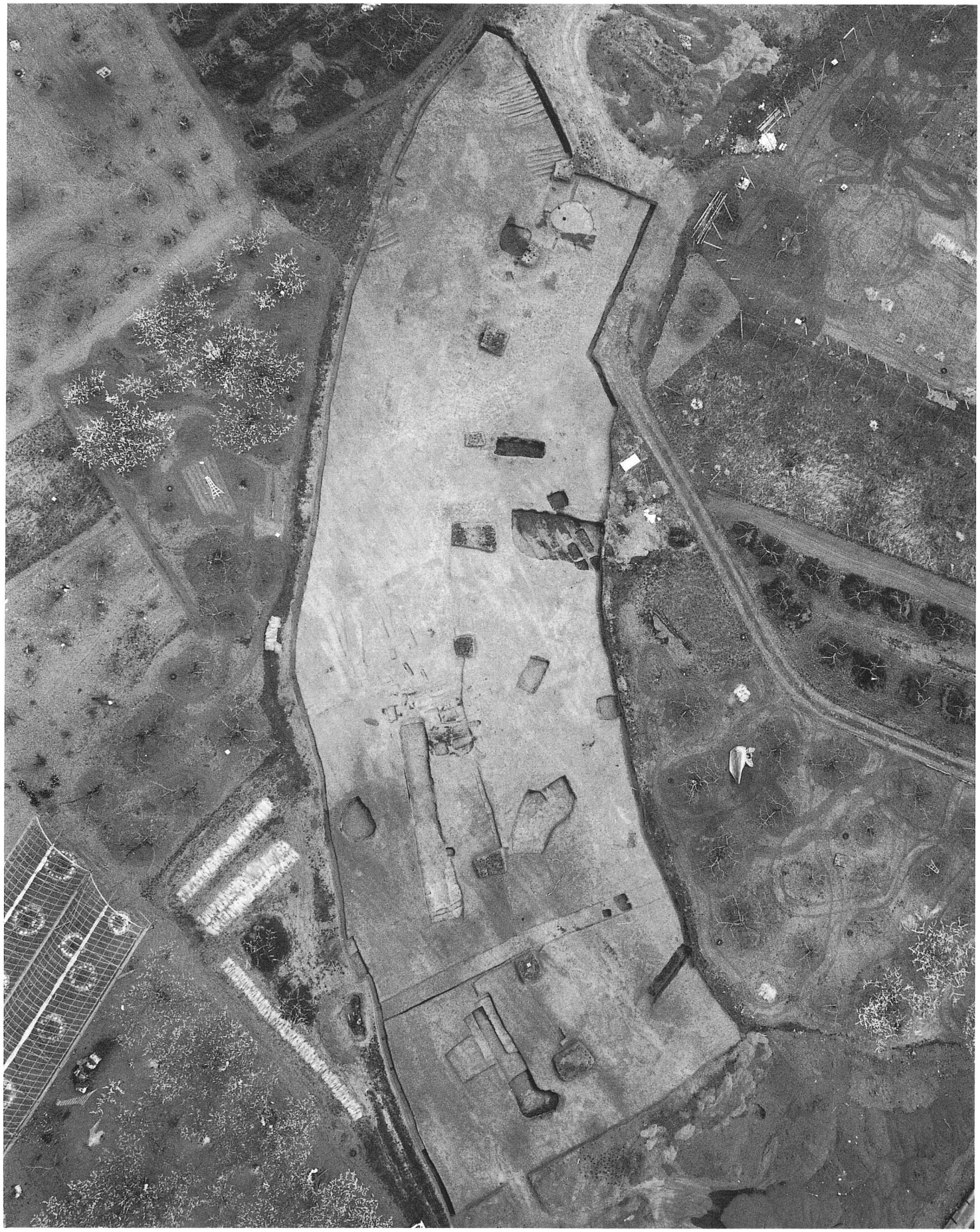


対応試料NO. 8
標準試料JG-1a

写真図版



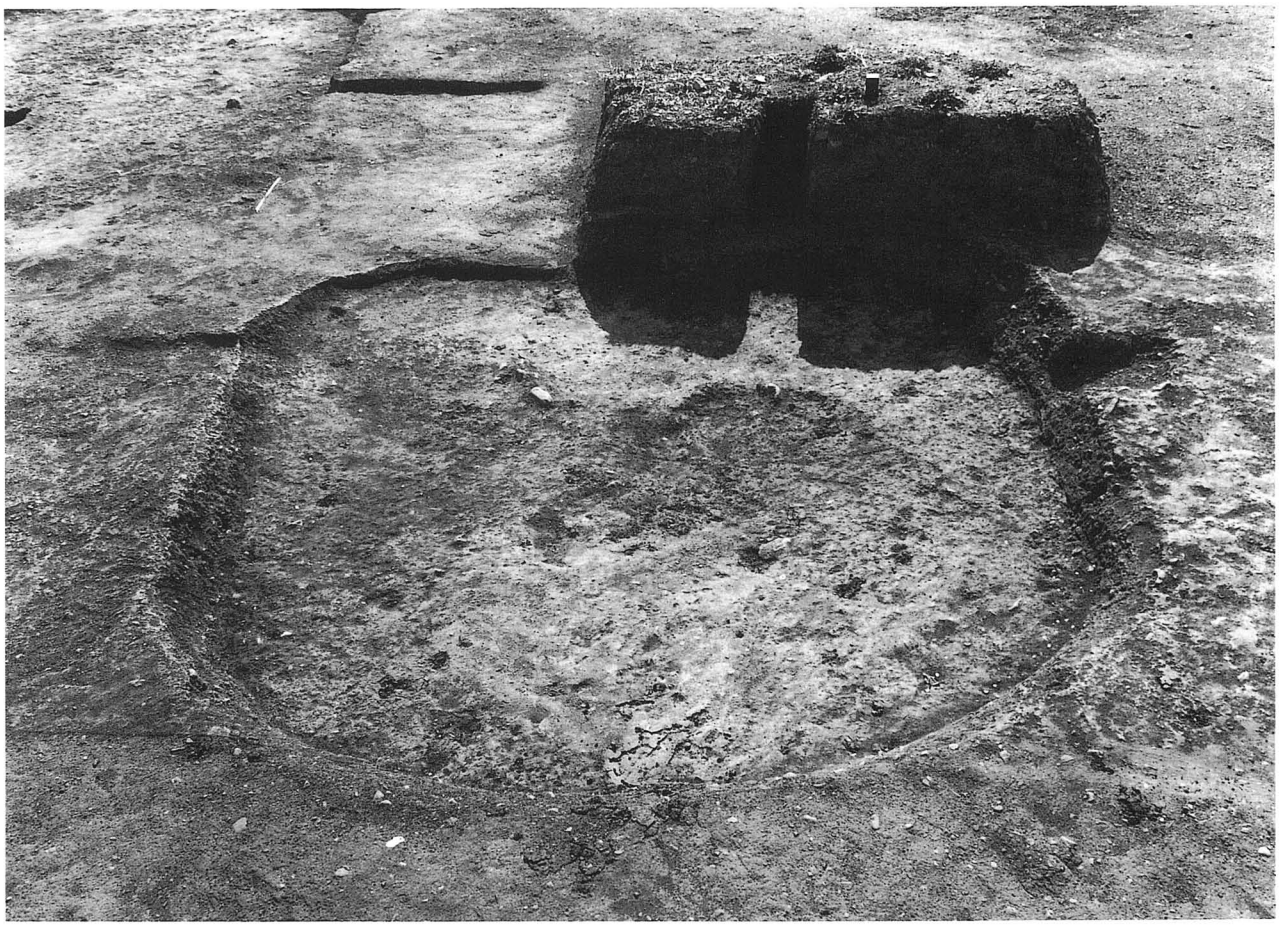
今戸瓦焼之図　亜欧堂田善（文化年間（1804～18）神戸市立博物館所蔵）



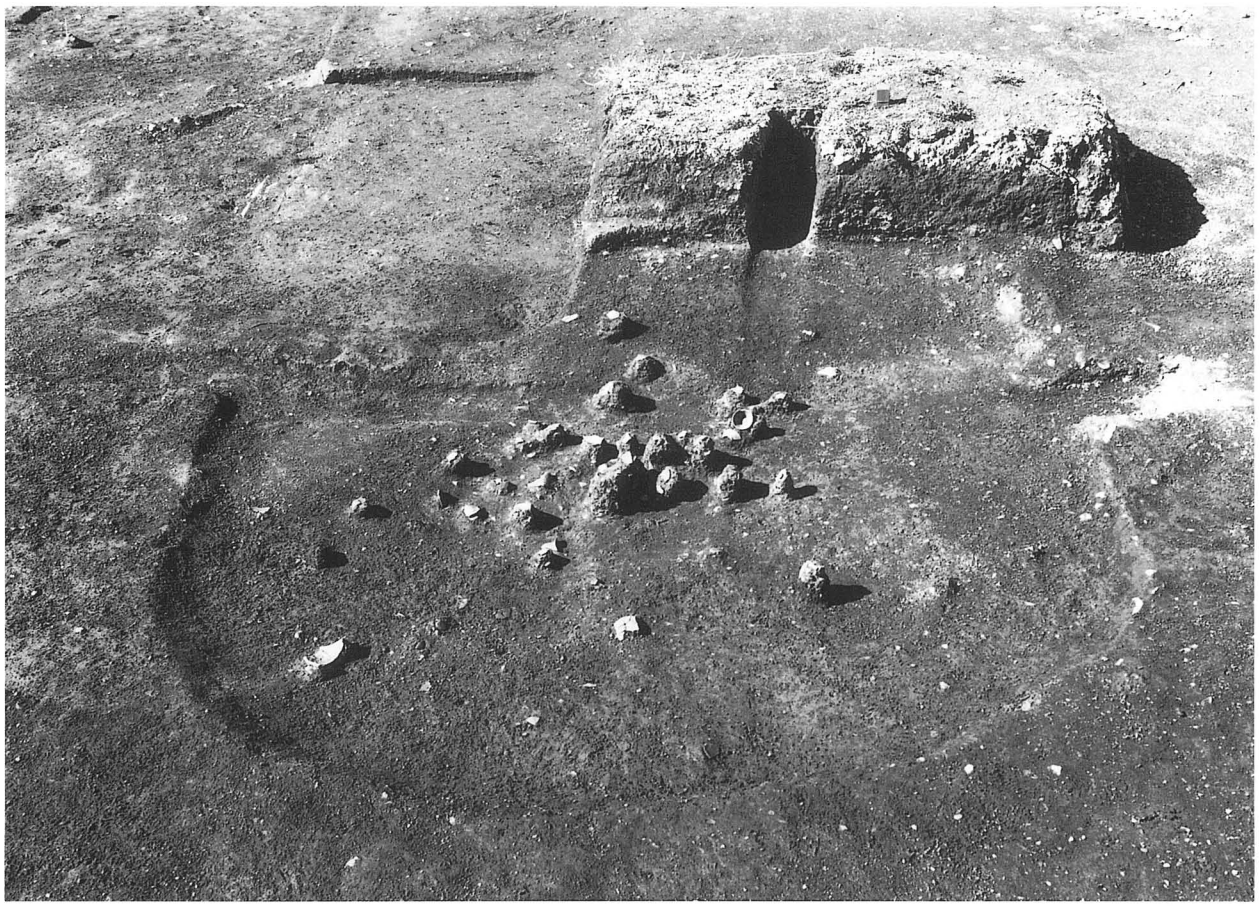
調査区全景

図版 2

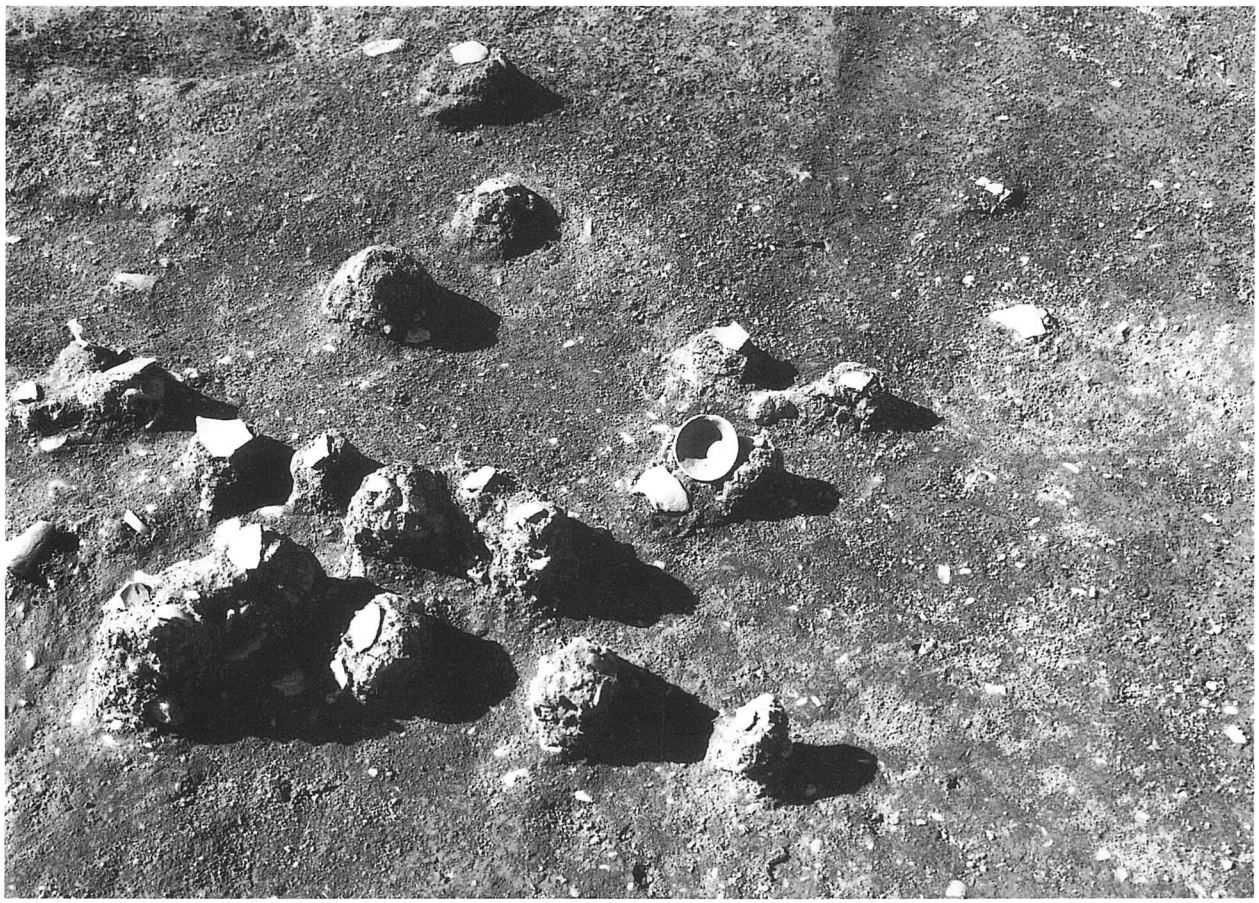
(1)　1 号竪穴状遺構



(2)　2 号竪穴状遺構

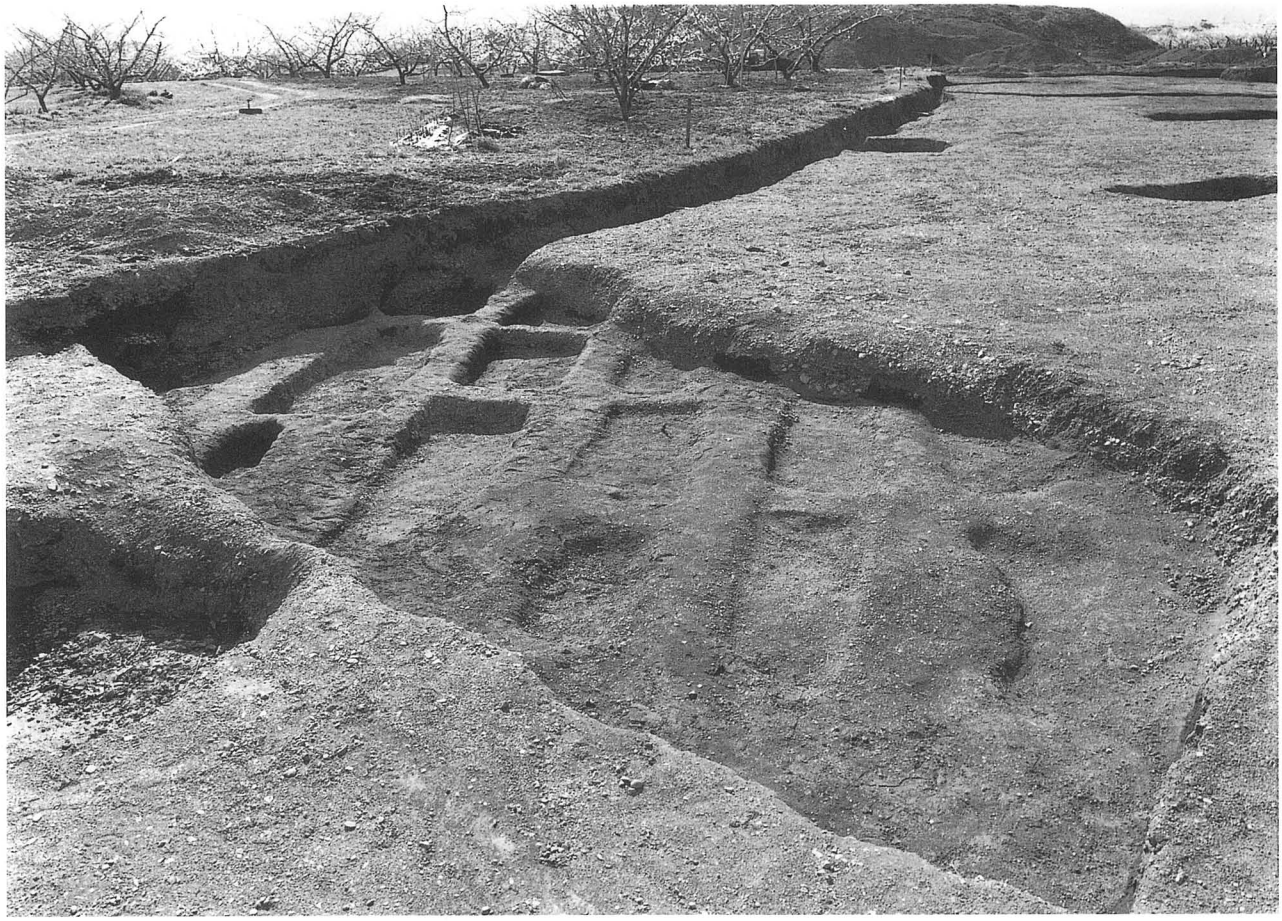


(1)　2 号竪穴状遺構遺物出土状況（全景）

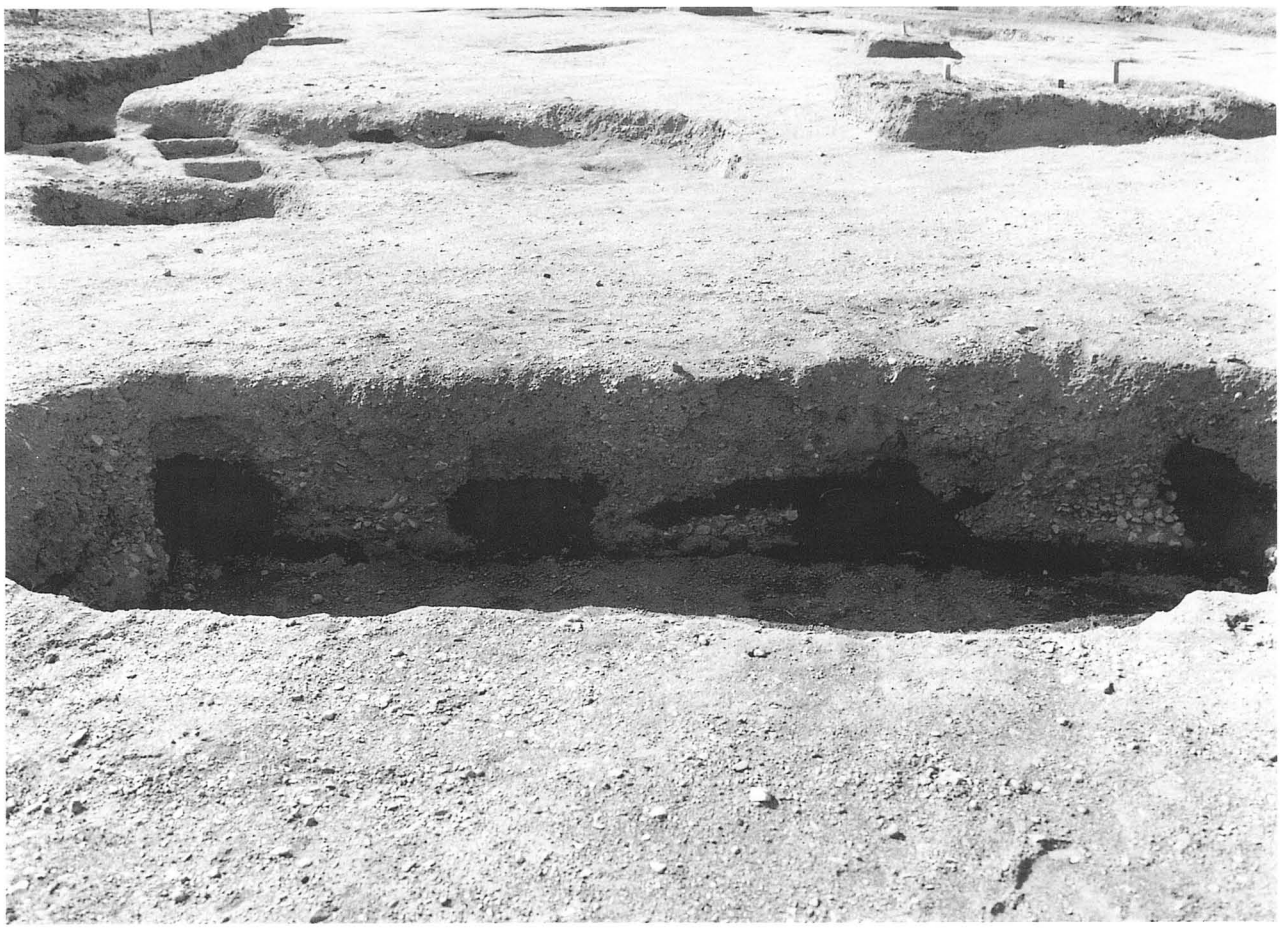


(2)　2 号竪穴状遺構遺物出土状況（部分）

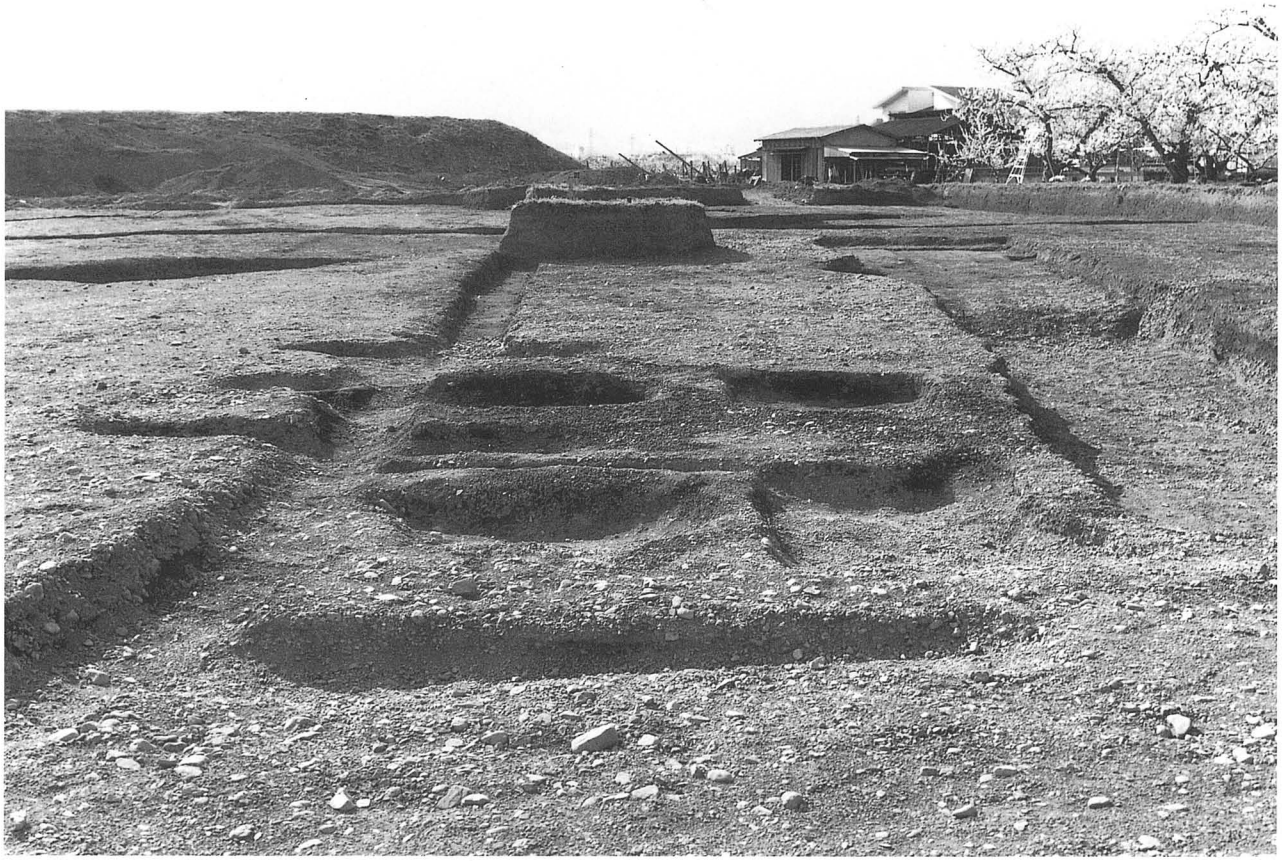
図版 4



(1)　粘土採掘坑（トレンチ２）



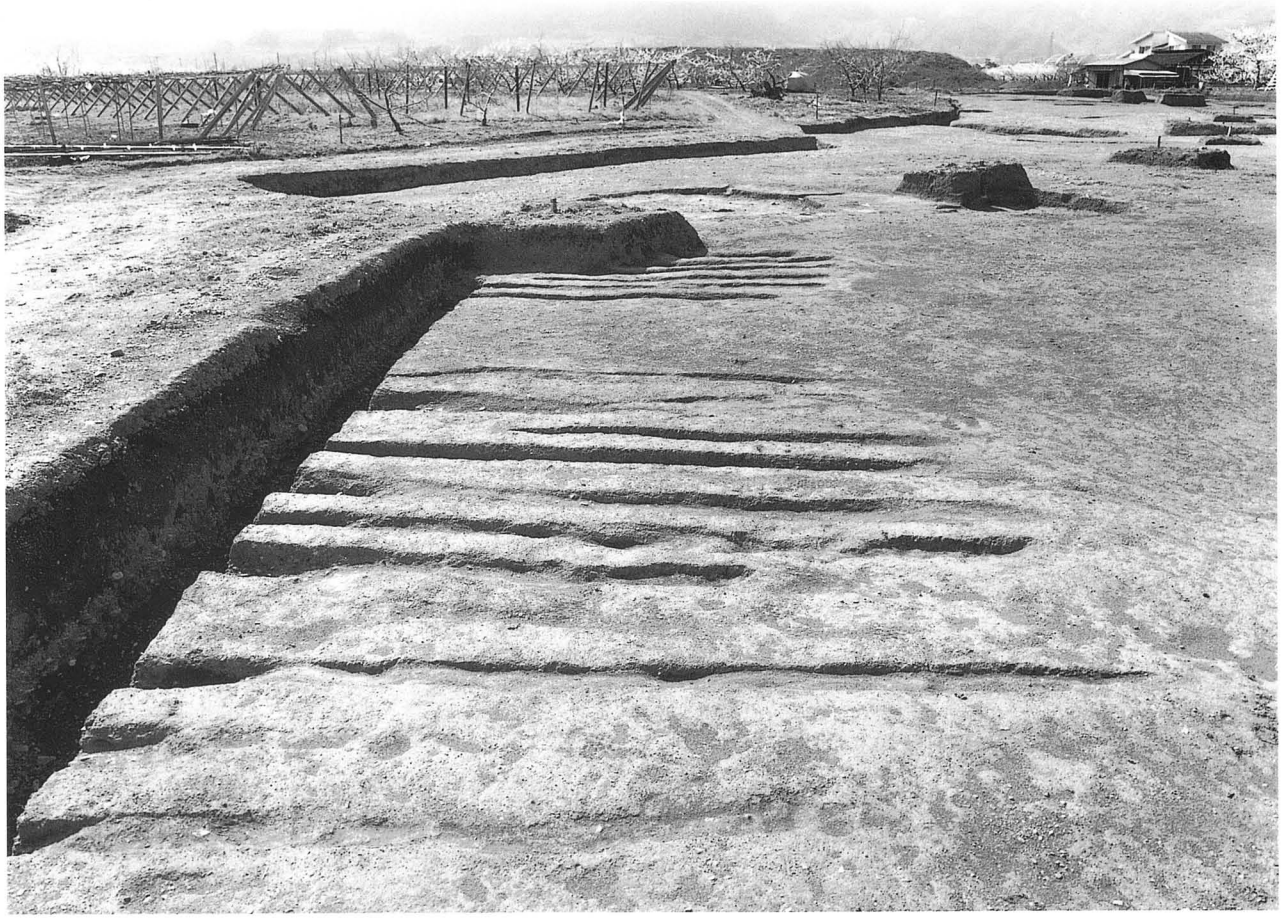
(2)　トレンチ１断面



(1)　粘土採掘坑

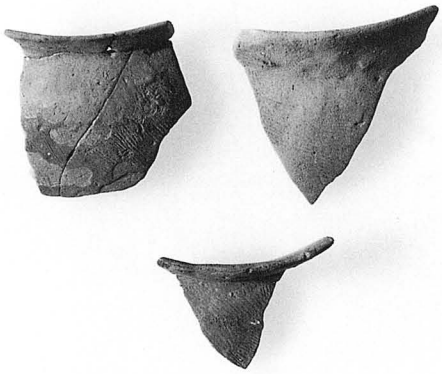
(2)　畝状遺構

図版 6



(1)　畝状遺構

(2)　同　南より



2竪出土（1、2、3）

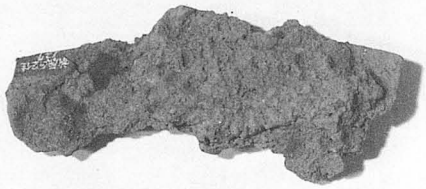
2竪出土（4）

2竪出土（9）

2竪出土（5）

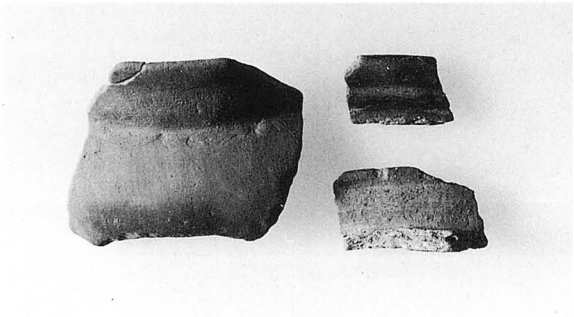
2竪出土（6）

2竪出土（7）

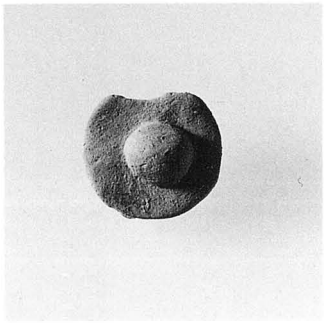


2竪出土鉄製品

1竪出土（2）



遺構外出土（1、3、4）



遺構外出土（2）

出土遺物

調査区作業風景

前原Ｇ遺跡報告書抄録

フリガナ	マエハラＧイセキ
書名	前原Ｇ遺跡
副題	新山梨環状道路建設に伴う発掘調査報告書
シリーズ	櫛形町文化財調査報告書　No.19
編著者名	山下大輔、若林初美、小口妙子
発行者	櫛形町教育委員会　山梨県新環状・西関東道路建設事務所
編集機関	櫛形町教育委員会
住所・電話番号	山梨県中巨摩郡櫛形町小笠原397-1　Tel（055）-282-0108
印刷所	鬼灯書籍株式会社　長野市柳原2133-5　Tel（026）244-0235
発行日	2000年２月28日
遺跡所在地	山梨県中巨摩郡櫛形町吉田字前原577-1他
1／25000地図名・位置	小笠原・北緯35°36′45″　東経138°29′11″
主要な時代	古墳時代　近世～近代
主な遺構	竪穴状遺構（古墳）、畝状遺構（時期不明）粘土採掘坑（近世～近代）
主な遺物	土師器・土製品・鉄製品
調査期間	1999年２月１日～３月31日
コード	市町村　193909　遺跡　34
調査面積	2800㎡
調査原因	新山梨環状道路建設に伴う発掘調査

表紙の絵について

表紙の絵は達磨窯といって近世に発達した瓦を焼くための窯です。その形態が「達磨さんが座禅しているような格好」をしているために達磨窯と呼ばれ、瓦の製造が盛んであった若草町加賀美でもこの達磨窯が盛んに作られ、多くの瓦を製造していたそうです。機械化の進む昭和の中頃からこの様な窯は取り壊されていき、現在では日本にほとんど現存していません。この絵は江戸時代の銅版画家である亜欧堂田善の「今戸瓦焼図」という絵の一部分で、神戸市立博物館に所蔵されています。

櫛形町文化財調査報告書 No.19

前原G遺跡

―― 新山梨環状道路建設に伴う発掘調査報告書 ――

平成12年2月24日　印 刷
平成12年2月28日　発 行

発　行　櫛形町教育委員会
山梨県新環状・西関東道路建設事務所

編　集　櫛形町教育委員会
山梨県中巨摩郡櫛形町小笠原397-1
☎ (055) 282－0108

印　刷　ほおずき書籍株式会社
長野県長野市柳原2133-5
☎ (026) 244－0235㈹